第２節　　地　理　歴　史

第１　地理歴史科の基本的事項

１　改訂の趣旨

平成28年12月21日の中央教育審議会の答申では，小・中・高等学校を通じた社会科，地理歴史科，公民科の「内容の見直し」について示されており，そこからは今回の高等学校地理歴史科の改訂の趣旨及び要点についても読み取ることができる。以下，枠内に中教審答申の記述を一部抜粋する。

⑴　社会科，地理歴史科，公民科の成果と課題

> 社会科，地理歴史科，公民科では，社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実し，知識や思考力等を基盤として社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力，自国の動向とグローバルな動向を横断的・相互的に捉えて現代的な諸課題を歴史的に考察する力，持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度など，国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育んでいくことが求められる。

> こうした「社会的な見方・考え方」は，社会科，地理歴史科，公民科としての本質的な学びを促し，深い学びを実現するための思考力，判断力の育成はもとより，生きて働く知識の習得に不可欠であること，主体的に学習に取り組む態度や学習を通して涵養される自覚や愛情等にも作用することなどを踏まえると，資質・能力全体に関わるものであると考えられる。

これを踏まえ，地理歴史科における「社会的な見方・考え方」は，各科目の特質に応じて以下のように整理するとともに，小・中・高等学校の学校種を超えて社会科，地理歴史科，公民科を貫く「社会的な見方・考え方」の構成要素として整理した。

○地理領域科目

「社会的事象の地理的な見方・考え方」として，「社会的事象を位置や空間的な広がりに着目して捉え，地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で，人間の営みと関連付け」て働かせるもの

○歴史領域科目

「社会的事象の歴史的な見方・考え方」として，「社会的事象を時期，推移などに着目して捉え，類似や差異などを明確にしたり事象同士を因果関係などで関連付けたりし」て働かせるもの

⑵　地理歴史科の改訂の基本的な考え方

地理歴史科の改訂において育成を目指す資質・能力が三つの柱として明確に整理されたことを踏まえ，その基本的な考え方を，次の３点に集約することができる。

(ｱ) 基礎的・基本的な「知識及び技能」の確実な習得

(ｲ) 「社会的な見方・考え方」を働かせた「思考力，判断力，表現力等」の育成

(ｳ) 主権者として，持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成

２ 地理歴史科改訂の要点

⑴　目標の改善

地理歴史科における目標については，小・中学校社会科との接続はもちろん，高等学校公民科との関連も踏まえ，学校種の違いによる発達段階や分野の特質に応じて，柱書と三つの資質・能力からなる目標を設定した。その際，従前からの学習指導要領における目標の趣旨を引き継ぎつつ，社会の変化に伴い，地理歴史科学習に求められる状況などを踏まえ，改善を図ることとした。

具体的には，小・中・高等学校の一貫性の観点から，社会科，地理歴史科，公民科が目指す究極のねらいに当たる文言については，小学校，中学校社会科では，「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」とし，高等学校地理歴史科及び公民科では，それを「形成者」については「有為な」を冠するとともに「公民としての資質・能力の基礎」については「公民としての資質・能力」とする共通の文言とし，「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」に関わる目標においては，各教科，各領域，各科目の特質を表す規定となるよう整理した。

⑵　科目の改善

〔地理総合〕の内容（大項目と中項目）

> A　地図や地理情報システムで捉える現代世界
> ⑴　地図や地理情報システムと現代世界
> B　国際理解と国際協力
> ⑴　生活文化の多様性と国際理解
> ⑵　地球的課題と国際協力
> C　持続可能な地域づくりと私たち
> ⑴　自然環境と防災
> ⑵　生活圏の調査と地域の展望

「地理総合」における改善・充実の要点は，主に次の６点である。

ア　「社会的事象の地理的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実

今回の改訂では，地理を学ぶ本質的な意義として，地理ならではの「見方・考え方」を，「社会的事象を，位置や空間的な広がりに着目して捉え，地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で，人間の営みと関連付けること」として整理した。これは，中学校社会科地理的分野とともに，これまでの学習指導要領下で重視してきた「地理的な見方や考え方」の趣旨を受け継ぐもので，それをこの「地理総合」でも働かせ，鍛えることが求められる。よって，「地理総合」の学習においては，以下のウからカまでの要点で示されるいずれの学習場面においても，その趣旨を受けて，「社会的事象の地理的な見方・考え方」を働かせ，鍛えることが求められる。

「地理総合」の学習においては，各中項目の学習内容に応じて多様な視点に着目して，課題を追究したり解決したりする学習を展開することが大切である。また，「見方・考え方」を用いることによって，生徒が獲得する知識の概念化を促し理解を一層深めたり，課題を主体的に解決しようとする態度などにも作用したりすることが期待されることからも，「地理総合」の学習の全体を通じて地理ならではの「見方・考え方」を働かせ，鍛える学習活動の充実が求められる。

イ　「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開

社会の情報化，グローバル化に伴い，日々膨大な数の事象が生まれては消えていく中で，それらの名称や仕組みを単に覚えるのではなく，選び出した真に必要な事象を基に，位置や空間的な広がりに着目して，その事象がそこにある意味や意義を見いだし，追究するような学習活動を重ねることは，「社会的事象の地理的な見方・考え方」を働かせ，鍛えることに他ならない。

ウ　地図や地理情報システムを活用して育む汎用的で実践的な地理的技能

「地理総合」の学習の冒頭に当たり，以降の学習の基盤となるよう，「現代世界の地域構成」を概観するとともに，「地図や地理情報システムなどを用いて，その情報を収集し，読み取り，まとめる基礎的・基本的な技能を身に付ける」学習活動を位置付けた。したがって，この中項目の学習で，汎用的で実践的な地理的技能の育成が完結するわけではなく，あえて「読図」あるいは「基礎的・基本的な技能」と示したように，あくまでその導入，端緒として位置付けられる。

エ　グローバルな視座から求められる自他の文化の尊重と国際協力

国際教育の視座に立ち，単に異文化の理解にとどまらない，双方向からの国際理解を促すための「自他の文化の尊重」をねらいに掲げ，網羅的な地域情報を取り上げるのではなく，あくまで世界の人々の特色ある生活文化に焦点を当てて，生活文化の多様性や変容の要因を考察するといった学習活動の位置付けを意図している。その上で，グローバル化が引き続き進展し，環境問題等の地球的課題が一層深刻化する現状において，中学校までに学習した世界の諸地域の多様性に関わる基礎的・基本的な知識，世界全体の地理的認識を基に，地球的課題の現状や要因について地域性を踏まえて考察するとともに，その解決の方向性について相互互恵の立場から我が国の国際協力の在り方を考察するような学習活動を位置付けることを意図したものである。

オ　我が国をはじめとする世界や生徒の生活圏における自然災害と防災

未曽有の災害である東日本大震災を経て，なお全国各地で生起する地震被害，さらに台風や集中豪雨などによる水害や土砂災害など，頻発する自然災害に対応した人々の暮らしの在り方を考えることは，我が国で生活する全ての人々にとって欠くことのできない「生きる力」である。そこで，大項目Ｃの⑴「自然環境と防災」においては，従前の「地理Ａ」において取り扱う「我が国の自然環境の特色と自然環境とのかかわり」だけでなく，「世界で見られる自然災害や生徒の生活圏で見られる自然災害」についても取り扱うことを明示し，その充実を図ることとした。

カ　持続可能な地域づくりのための地域調査と地域展望

「地理総合」の学習の集大成として位置付けられる中項目「生活圏の調査と地域の展望」では，生徒自身にとって最も身近な地理的空間である生活圏を対象とし，実際に観察や野外調査，文献調査などを行うことによって，そこに存在する地理的な課題を見いだし，その解決策，改善策を考察，構想することを期待している。さらに学習成果を地域に還元するなど社会参画を目指すことを視野に入れた一連の主体的な学習活動によって，ここでの学習が授業の中で終結することなく，授業後の日常生活においても持続的に行われ，実社会に出ても継続的に持続可能な生活圏の在り方を考え続けることができる契機となるよう意図したものである。

〔地理探究〕の内容（大項目と中項目）

A　現代世界の系統地理的考察
⑴　自然環境
⑵　資源，産業
⑶　交通・通信，観光
⑷　人口，都市・村落
⑸　生活文化，民族・宗教
B　現代世界の地誌的考察
⑴　現代世界の地域区分
⑵　現代世界の諸地域
C　現代世界におけるこれからの日本の国土像
⑴　持続可能な国土像の探究

「地理探究」における改善・充実の要点は，主に次の５点である。

ア　「社会的事象の地理的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実

「地理総合」において働かせ，鍛えてきた「社会的事象の地理的な見方・考え方」を，さらに「地理探究」においても働かせ，鍛えていくことが求められる。ここでも，「社会的事象の地理的な見方・考え方」を構成する視点を，「地理探究」の各中項目の学習内容を踏まえて，適宜適切にそれらの視点に着目して学習活動を進めることが大切である。

「地理探究」の学習においては，このように各中項目の学習内容に応じて多様な視点に着目して，課題を追究したり解決したりする学習を展開することが大切である。また，「見方・考え方」を用いることによって，生徒が獲得する知識の概念化を促し理解を一層深めたり，課題を主体的に解決しようとする態度などにも作用したりすることが期待されることからも，「地理探究」の学習の全体を通じて，地理ならではの「見方・考え方」を働かせ，鍛える学習活動の充実が求められる。

イ　「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開

「地理総合」と同様に「地理探究」においても，「社会的事象の地理的な見方・考え方」を働かせ，鍛えるためには，「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開が必要である。

「地理探究」では，定まった答えのない課題を対象に試行錯誤を重ねながら探究する活動を通して，日本の将来を担う生徒自身が，我が国が抱える地理的な課題の解決の方向性を，批判的思考力を働かせて議論するなどの活動によって，在るべき国土像を見いだそうとすることを求めている。

ウ　大項目Ｃの前提としての系統地理的考察と地誌的考察

系統地理的考察では，自然地理的な事象（自然環境など）と人文地理的な事象（資源，産業，交通・通信，観光，人口，都市・村落，生活文化，民族・宗教など）について，それぞれの事象の分布やまとまりに見られる空間的な規則性，傾向性とその要因などに着目して考察することが求められる。また，地誌的考察では，それらの個別の事象が重層的に組み合わさった，現代世界を構成する諸地域の地域性と諸課題を，選択した地域の学習を通して考察することとなる。これらの考察は，地理の学習や研究に当たっていずれも無くてはならぬ存在として，車の両輪のような役割を担っているが，この「地理探究」においては，そこにとどまらない位置付けが求められる。すなわち両者は，「持続可能な国土像の探究」を図る上での前提であり，大項目Ａで取り上げる諸事象の学習や大項目Ｂで取り上げる諸地域の学習を通して考察，理解したことが，大項目Ｃの学習で活用される必要がある。

エ　「現代世界の系統地理的考察」における「交通・通信，観光」の項目化

「現代世界の系統地理的考察」の「自然環境」，「資源，産業」，「人口，都市・村落」，「生活文化，民族・宗教」の項目構成を見直し，従来，「資源，産業」として，主にそれらの生産や立地などに関わる諸事象の規則性や傾向性を対象としてきた項目から，人や物，情報などの動きに注目し，それらを支える社会資本や産業に関わる諸事象を取り出し，交通地理学や観光地理学などの研究成果を踏まえてその規則性や傾向性を考察する新たな中項目として「交通・通信，観光」を位置付けることを意図したものである。

オ　「現代世界におけるこれからの日本の国土像」を問う探究項目の充実

この科目が「地理探究」として探究活動の実施を中核のねらいとすることから，従前の「地理Ｂ」では大項目⑶の「現代世界の地誌的考察」を構成する三つの中項目の一つという位置付けであった「現代世界と日本」における探究的な学習を充実させ，大項目Ｃの「現代世界におけるこれからの日本の国土像」を構成する唯一の中項目である「持続可能な国土像の探究」として重点化を図ることとした。

〔歴史総合〕の内容（大項目と中項目）

A　歴史の扉
⑴　歴史と私たち
⑵　歴史の特質と資料
B　近代化と私たち
⑴　近代化への問い
⑵　結び付く世界と日本の開国
⑶　国民国家と明治維新
⑷　近代化と現代的な諸課題
C　国際秩序の変化や大衆化と私たち
⑴　国際秩序の変化や大衆化への問い
⑵　第一次世界大戦と大衆社会
⑶　経済危機と第二次世界大戦
⑷　国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題
D　グローバル化と私たち
⑴　グローバル化への問い
⑵　冷戦と世界経済
⑶　世界秩序の変容と日本
⑷　現代的な諸課題の形成と展望

「歴史総合」における改善・充実の要点は，主に次の６点である。

ア　「社会的事象の歴史的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実

今回の改訂においては，歴史を学ぶ本質的な意義として，歴史ならではの「見方・考え方」を，「社会的事象を，時期，推移などに着目して捉え，類似や差異などを明確にしたり，事象同士を因果関係などで関連付けたりすること」として整理した。

これを受けて「歴史総合」の学習では，主体的・対話的で深い学びを実現するために，これらの「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を働かせて，鍛えることが求められる。

イ　「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開

「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を生徒が働かせ，鍛えるためにはそれを促す学習場面の設定が必要であり，そのためには生徒自身が社会的事象を多面的・多角的に考察し，表現する中で，「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を働かせることができるような，適切な「主題」や「問い」の設定が前提となる。

そのため大項目ＢからＤでは，中項目⑴に学習内容への見通しをもたせる「問い」を表現する学習，中項目⑵と⑶に，主題を設定して，それを踏まえた課題(問い)を設定して展開する学習，中項目⑷には，主題を設定して，現代的な諸課題の形成や現代的な諸課題を考察，構想する学習をそれぞれ示している。

ウ　単元や内容のまとまりを重視した学習の展開

「歴史総合」では，大項目が学習の大きなまとまりをもって構成されている。大項目内の中項目は，⑴で資料から生徒が問いを表現して課題意識を形成し，⑵，⑶で⑴の生徒が表現した問いを踏まえ，歴史の大きな変化に着目した近現代の歴史の理解を深め，⑷で⑴から⑶の学習を踏まえて，現代的な諸課題の展望などについて生徒が考察，構想するという一連の構造をもっている。また，中項目⑵及び⑶の学習においては，「知識及び技能」と「思考力，判断力，表現力等」に関わる事項が内容のまとまりごとに小項目を形成し，その小項目の中で主題を設定し，主題を踏まえた問いを示すことで学習が展開するよう構成されている。

エ　歴史の大きな変化に着目し，世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉える内容の構成

「歴史総合」では，現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史について，人々の生活や社会の在り方の変化を，「近代化」，「国際秩序の変化や大衆化」，「グローバル化」と表し，これを踏まえ，学習内容の大項目ＢからＤを構成した。

また，「歴史総合」は従前の歴史領域の科目のねらいを総合的に踏まえつつ，世界とその中における日本を広く相互的な視野から歴史を捉える科目として内容を構成した。

オ　資料を活用し，歴史の学び方を習得する学習

「思考力，判断力，表現力等」を身に付けることを重視する学習においては，考察する際の根拠となる資料の扱いが重要となる。そのために，「歴史総合」では，学習のほぼ全般にわたり，資料を活用した学習の充実を図っている。生徒が資料を活用し考察する学習を繰り返すことで，それに関わる技能の定着を図りつつ確かな理解に至るという，歴史の学び方を習得することを意図したものである。

カ　現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する学習

大項目Ｂの⑷「近代化と現代的な諸課題」及びＣの⑷「国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題」では，現代的な諸課題の形成に関わる歴史の理解を図る学習を，大項目Ｄの⑷「現代的な諸課題の形成と展望」では，生徒が自身の関心をもとに主題を設定し，歴史的な経緯を踏まえて現代的な諸課題を理解したり，考察，構想したりする学習を設定した。これらの学習は，生徒が現代のみならず，将来においても引き続き直面することの予想される課題に対して向き合うことができる資質・能力を育成することを意図したものである。

〔日本史探究〕の内容（大項目と中項目）

A　原始・古代の日本と東アジア
⑴　黎明期の日本列島と歴史的環境
⑵　歴史資料と原始・古代の展望
⑶　古代の国家・社会の展開と画期
（歴史の解釈，説明，論述）
B　中世の日本と世界
⑴　中世への転換と歴史的環境
⑵　歴史資料と中世の展望
⑶　中世の国家・社会の展開と画期
（歴史の解釈，説明，論述）
C　近世の日本と世界
⑴　近世への転換と歴史的環境
⑵　歴史資料と近世の展望
⑶　近世の国家・社会の展開と画期
（歴史の解釈，説明，論述）
D　近現代の地域・日本と世界
⑴　近代への転換と歴史的環境
⑵　歴史資料と近代の展望
⑶　近現代の地域・日本と世界の画期と構造
⑷　現代の日本の課題の探究

「日本史探究」における改善・充実の要点は，主に次の６点である。

ア　「社会的事象の歴史的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実

「歴史総合」において働かせ，鍛えてきた「社会的事象の歴史的な見方・考え方」をさらに「日本史探究」においても働かせ，鍛えていくことが求められる。「日本史探究」においても，各中項目の学習内容に応じて多様な視点に着目して，歴史に関わる事象を比較したり，関連させたりして捉え，課題を追究したり解決したりする学習を展開することが大切である。「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を用いることで，生徒が獲得する知識の概念化を促し理解を一層深めたり，課題を主体的に解決しようとする態度などにも作用したりすることが期待されることからも，歴史ならではの「見方・考え方」に基づく学習活動の充実が求められる。

イ　「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開

「歴史総合」と同様に「日本史探究」においても，「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を働かせ，鍛えるためには，「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開が必要である。

「日本史探究」では，大項目ＡからＤまでの⑴には，生徒がその後の学習への見通しをもつための「時代を通観する問い」を表現する学習，⑶には主題を設定し，それを踏まえた課題（問い）を設定して展開する学習，大項目Ｄの⑷には，生徒が現代の日本の諸課題とその展望について，自ら主題を設定して，考察，構想する学習を示している。

ウ　単元や内容のまとまりを重視した学習の展開

「日本史探究」では，各大項目のそれぞれ中項目⑴から⑶までが，以下のように一連の学習の展開を形成している。

中項目⑴では，時代の転換を扱い，生徒が時代の特色を探究するための筋道や学習の方向性を導く「時代を通観する問い」を表現する。

中項目⑵では，⑴で表現した「時代を通観する問い」を成長させ，時代の特色について，⑶の学習への見通しを立てて探究的な学びに向かうための仮説を表現する。

中項目⑶では，⑴の問いや⑵の仮説を踏まえ，各時代の歴史の展開について，事象の意味や意義，関係性などを考察し，歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期を表現する学習を行う。

また，中項目 ⑶では，「知識及び技能」と「思考力，判断力，表現力等」に関わる事項が内容のまとまりごとに小項目を形成し，その小項目の中で主題を設定し，主題に関わる問いを設定して学習が展開する。

また，大項目Ｄは，「歴史総合」並びに「日本史探究」の大項目ＡからＣまでの学習の成果や育成された資質・能力を活用し，歴史学習のまとめとしての性格が示されている。

エ　「歴史の解釈，説明，論述」を通じた知識，概念の深い理解と思考力，判断力，表現力等の育成の一層の重視

「日本史探究」は，「歴史総合」の学習を踏まえるとともに，従前の「日本史Ａ」，「日本史Ｂ」の「諸資料を活用して歴史を考察し表現する学習」を発展的に継承する科目として設置された。今回の改訂では，「歴史総合」が必履修科目として設置され，そこで思考力，判断力，表現力等の育成や，基本的な「歴史の学び方」についての習得を図ることを踏まえ，「日本史探究」では，学習の全般にわたって「歴史の解釈，説明，論述」などの学習活動を繰り返し行うことで，習得した知識，概念の深い理解とともに，思考力，判断力，表現力等の育成を，一層図ることとした。

オ　資料を活用し，歴史の学び方を習得する学習

「思考力，判断力，表現力等」を身に付けることを重視する学習においては，考察する際の根拠となる資料の扱いが重要となる。そのために，「日本史探

究」では，ほぼ全般にわたり，資料を活用した学習の充実を図っている。

カ　歴史的経緯を踏まえた現代の日本の課題の探究

「日本史探究」では，科目のまとめとして，現代の日本の課題を探究する学習を設置している。その際，「歴史総合」で育成した，歴史的な経緯を踏まえて現代的な諸課題の解決に向けて考察，構想する力を活用することが求められる。

「歴史総合」で学習した「世界とその中の日本」における現代的な諸課題の形成を踏まえ，それらを日本の社会の中で，より具体的に考察できるよう，地域社会や身の回りの事象と関連させて，日本や世界の動きの中で課題を探究する考察が可能となるように意図したものである。

〔世界史探究〕の内容（大項目と中項目）

A　世界史へのまなざし
⑴　地球環境から見る人類の歴史
⑵　日常生活から見る世界の歴史
B　諸地域の歴史的特質の形成
⑴　諸地域の歴史的特質への問い
⑵　古代文明の歴史的特質
⑶　諸地域の歴史的特質
C　諸地域の交流・再編
⑴　諸地域の交流・再編への問い
⑵　結び付くユーラシアと諸地域
⑶　アジア諸地域とヨーロッパの再編
D　諸地域の結合・変容
⑴　諸地域の結合・変容への問い
⑵　世界市場の形成と諸地域の結合
⑶　帝国主義とナショナリズムの高揚
⑷　第二次世界大戦と諸地域の変容
E　地球世界の課題
⑴　国際機構の形成と平和への模索
⑵　経済のグローバル化と格差の是正
⑶　科学技術の高度化と知識基盤社会
⑷　地球世界の課題の探究

「世界史探究」における改善・充実の要点は，主に次の６点である。

ア　「社会的事象の歴史的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実

「歴史総合」において働かせ，鍛えてきた「社会的事象の歴史的な見方・考え方」をさらに「世界史探究」においても，各中項目の学習内容に応じて多様な視点に着目して，歴史に関わる事象を比較したり関連付けたりして捉え，課題を追究したり解決したりする学習を展開することが大切である。

イ　「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開

「歴史総合」と同様に「世界史探究」においても，「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を働かせ，鍛えるためには，「主題」や，「問い」を中心に構成する学習の展開が必要である。多様な地域の歴史や諸地域間の相互依存関係の変化などを学習する世界の歴史を，世界の大きな枠組みと展開において捉えるために，事象の意味や意義，特色などを見いだし，学習のねらいを明確にして，課題を追究する学習の構成を図ることが求められる。

ウ　単元や内容のまとまりを重視した学習の展開

「世界史探究」では，大項目が学習の大きなまとまりをもって構成されている。大項目Ｂ，Ｃ及びＤそれぞれの中項目は，⑴で資料から生徒が問いを表現して課題意識を形成し，⑵，⑶及び⑷で，⑴の生徒が表現した問いを踏まえ，世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義などの理解を深めるという一連の構造をもっている。さらに，大項目Ｅの中項目は，⑴から⑶までの学習で，地球世界の課題を理解し，⑷で，それらを踏まえて，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究するという一連の構造をもっている。また，各中項目内で「知識及び技能」と「思考力，判断力，表現力等」に関わる事項が内容のまとまりごとに小項目を形成し，その小項目の中で主題を設定したり，問いを設定したりする学習が展開する。

エ　世界の歴史の大きな枠組みと展開を捉える内容の構成

「世界史探究」は，世界の歴史の大きな枠組みと展開を，諸地域の歴史的特質の形成，諸地域の交流・再編，諸地域の結合・変容という構成に沿って学習した上で，地球世界の課題の形成に関わる世界の歴史について探究する活動を設けている科目である。これを踏まえて，大項目ＢからＥを構成した。一連の学習活動を通して，地球世界につながる諸地域の社会や文化の多様性や複合性について段階的に考察を深めるような学習の一層の充実を図った。

オ　資料を活用し，歴史の学び方を習得する学習

「思考力，判断力，表現力等」を身に付けることを重視する学習においては，考察する際の根拠となる資料の扱いが重要となる。そのため，「世界史探究」では，学習のほぼ全般にわたり，資料を活用した学習の充実を図っている。「歴史総合」の学習の成果を踏まえて，さらに資料を活用する技能を高める指導の工夫が必要である。生徒が資料を活用し考察する学習を繰り返すことで，それに関わる技能の定着を図るとともに内容の確かな理解に至るという，歴

史の学び方を習得することを意図したものである。

カ　歴史的経緯を踏まえた地球世界の課題の探究

従前の「世界史Ａ」，「世界史Ｂ」においても，探究する活動が重視されてきた。「世界史探究」では，それらのねらいを発展的に継承し，大項目Ｅ「地球世界の課題」が設置されている。「歴史総合」で学習した「世界とその中の日本」における現代的な諸課題の形成を踏まえて，持続可能な社会の実現を視野に入れ，地球世界の課題の形成に関わる世界史の歴史について多面的・多角的に探究する考察が可能となるように意図したものである。

３　地理歴史科の目標及び科目編成

⑴　地理歴史科の目標

> 社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

教科目標のこの部分は，地理歴史科で育成を目指す目標のうち柱書として示された箇所であり，以降示された，「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」という，育成を目指す資質・能力の三つの柱に沿った目標とともに，従前の目標の趣旨を継承するものとなっている。

この柱書は，前段と後段の二段階で構成されている。前段は「社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して」という部分で，地理歴史科を含む社会科，地理歴史科，公民科の特質に応じた学び方を示している。社会的な見方・考え方については，社会科，地理歴史科，公民科の特質に応じた見方・考え方の総称であり，社会的事象等の意味や意義，特色や相互の関連を考察したり，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法（考え方）」であると考えられる。そして，社会的な見方・考え方を働かせるとは，そうした「視点や方法（考え方）」を用いて課題を追究したり解決したりする学び方を表すとともに，これを用いることにより児童生徒の「社会的な見方・考え方」が鍛えられていくことを併せて表現している。

こうした「社会的な見方・考え方を働かせ」ることは，社会科，地理歴史科，公民科としての本質的な学びを促し，深い学びを実現するための思考力，判断力の育成はもとより，生きて働く知識の習得に不可欠であること，主体的に学習に取り組む態度にも作用することなどを踏まえると，資質・能力全体に関わるものであると考えられるため，柱書に位置付けられている。

次に，課題を追究したり解決したりする活動については，単元など内容や時間のまとまりを見通して学習課題を設定し，諸資料や調査活動などを通して調べたり，思考，判断，表現したりしながら，社会的事象の特色や意味などを理解したり社会への関心を高めたりする学習などを指している。こうした学習は，地理歴史科において従前から課題を追究する学習，課題を探究する学習，課題解決的な学習などとして，その充実が求められており，「課題を追究したり解決したりする活動」はそれと趣旨を同じくするものである。そこでは，主体的・対話的で深い学びが実現されるよう，生徒が社会的事象等から学習課題を見いだし，課題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し，追究結果をまとめ，自分の学びを振り返ったり新たな問いを見いだしたりする方向で充実を図っていくことが大切である。

次に，後段は「広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す」という部分で，小学校及び中学校における社会科学習を踏まえた，高等学校における地理歴史科，公民科の共通のねらいであり，そこでの指導を通して，その実現を目指す究極的なねらいを示している。

「広い視野に立ち」については，中学校までの社会科学習の成果を活用することを意味するとともに，多面的・多角的に考察しようとする態度と公正で客観的な見方・考え方に立つことに関わる意味と，国際的な視野という空間的な広がりに関わる意味が含まれている。

「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す」の部分は，目標の⑴から⑶までにそれぞれ示された資質・能力を育成することが，「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者」に必要とされる「公民としての資質・能力」を育成することにつながることを示している。

> ⑴　現代世界の地域的特色と日本及び世界の歴史の展開に関して理解するとともに，調査や諸資料から様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

現代世界の地域的特色と日本及び世界の歴史の展開については，地理歴史科で扱う学習対象を示し，それらに関して理解するとは，単に知識を身に付けること

ではなく，基礎的・基本的な知識を確実に習得しながら，既得の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより，学習内容の深い理解と，個別の知識の定着を図るとともに，社会における様々な場面で活用できる，概念などに関する知識として獲得していくことをも示している。

「調査や諸資料から様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付ける」については，社会的な見方・考え方を働かせて，調査活動や諸資料から，課題の解決という目的に合わせて必要な情報を適切かつ効果的に収集し，読み取り，まとめる技能を身に付けることを意味している。このうち「適切かつ効果的に」については，課題の解決に向けて客観的で誰もが納得し得る説得力のある情報を，複数の資料を照らし合わせながら収集していくことを意味している。そして，収集した情報を，社会的な見方・考え方を働かせて，比較したり，関連付けたりして，事象や出来事の原因や理由，結果や影響について読み取り，解釈する技能が必要となる。

これらの技能は，単元など内容や時間のまとまりごとに全てを身に付けようとするものではなく，資料の特性等とともに情報を収集する手段やその内容に応じて様々な技能や留意すべき点が存在すると考えられる。そのため，小・中学校の社会科での学習を踏まえるとともに，地理歴史科の学習において生徒が身に付けることが目指される技能を繰り返し活用し，その習熟を図るように指導することが大切である。

> ⑵　地理や歴史に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり， 社会に見られる課題の解決に向けて構想したりする力，考察・構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。

「地理や歴史に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を，概念などを活用して多面的・多角的に考察する力」については，社会的事象個々の仕組みや働きを把握することにとどまらず，その果たしている役割や事象相互の結び付きなども視野に，様々な側面，角度から捉えることのできる力を示している。

このうち小・中学校にはない「概念などを活用して」については，これまでの学習によって獲得された，様々な地理的事象，歴史的事象の一般的な規則性，傾向性を通して，ここで扱う地理や歴史に関わる事象を捉えることを意味しており，「多面的・多角的に考察」するとは，学習対象としている社会的事象自体が様々な側面をもつ「多面性」と，社会的事象を様々な角度から捉える「多角性」とを踏まえて考察することを意味している。

「社会に見られる課題の解決に向けて構想」する力については，現実社会において生徒を取り巻く多種多様な課題に対して，「それをどのように捉えるのか」，「それとどのように関わるのか」，「それにどのように働きかけるのか」といったことを問う中で，それらの課題の解決に向けて自分の意見や考えをまとめ，課題解決の在り方を問うことのできる力を意味している。

「考察・構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力」については，考察，構想したことを，資料等を適切に用いて論理的に示したり，その示されたことを根拠に自分の意見や考え方を伝え合い，自分や他者の意見や考え方を発展させたり，合意形成に向かおうとしたりする力であると捉えられる。

> ⑶　地理や歴史に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚，我が国の国土や歴史に対する愛情，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

「地理や歴史に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度」については，地理や歴史に関わる諸事象に関連して，学習上の課題を主体的，意欲的に解決しようとする態度や，よりよい社会の実現に向けて，多面的・多角的に考察，構想したことを社会生活に生かそうとする態度などを意味している。

「多面的・多角的な考察や深い理解」とは，地理歴史科の学習における考察や理解の特質を示している。そうした学習を通して「涵養される日本国民としての自覚，我が国の国土や歴史に対する愛情，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚」は，地理歴史科において育成することが期待される「学びに向かう力，人間性等」であることを意味している。

これは，いずれも現代世界の地域的特色と日本及び世界の歴史の展開についての多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養されるものであり，既述の資質・能力を含む三つの柱に沿った資質・能力の全てが相互に結び付き，養われることが期待される。

⑵　科目の編成と履修

科目	標準単位数
地理総合	２ 単 位
地理探究	３ 単 位
歴史総合	２ 単 位
日本史探究	３ 単 位
世界史探究	３ 単 位

地理歴史科は，「地理総合」と「歴史総合」をいずれも全ての生徒に履修させることとし，その「地理総合」を履修した後に選択科目である「地理探究」を，同じく「歴史総合」を履修した後に選択科目である「日本史探究」，「世界史探究」を履修できる。また，標準単位数については，必履修科目「地理総合」，「歴史総合」はいずれも２単位，「地理探究」，「日本史探究」及び「世界史探究」はいずれも３単位とした。

第２　各科目の概要

１　「地理総合」

⑴　性格及び目標

ア　性格

「地理総合」は，持続可能な社会づくりを目指し，環境条件と人間の営みとの関わりに着目して現代の地理的な諸課題を考察する科目であり，「歴史総合」と相互補完的な役割を果たしながら地理歴史科の目標を達成するとともに，社会で求められる資質・能力を全ての生徒に育むという観点から，地理歴史科を構成する空間軸と時間軸をそれぞれ学習の基軸とする科目として，「地理総合」は「歴史総合」ともに必履修科目として位置付けられている。

イ　目標

「地理総合」の目標は，地理歴史科の目標構成と同様に，柱書として示された目標と，「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の資質・能力の三つの柱に沿った，それぞれ⑴から⑶までの目標から成り立っている。

> 社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

この柱書における「社会的事象の地理的な見方・考え方」については，今回の中教審の答申を踏まえ，社会的事象を，位置や空間的な広がりに着目して捉え，地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で，人間の営みと関連付けることとされ，考察，構想する際の視点や方法（考え方）として整理されている。こうした見方・考え方を働かせることは，事象の意味や意義，特色や相互の関連を考察したり，地域に見られる課題を把握して，その解決に向けて構想したりするということであり，また，それを用いることによって生徒が獲得する知識の概念化を促し，理解を一層深めたり，課題を主体的に解決しようとする態度などにも作用したりするということである。こうした見方・考え方に根ざした追究の視点とそれを生かして解決すべき課題（問い）を設定する活動が，地理学習において主体的・対話的で深い学びを実現するために不可欠である。

> ⑴　地理に関わる諸事象に関して，世界の生活文化の多様性や，防災，地域や地球的課題への取組などを理解するとともに，地図や地理情報システムなどを用いて，調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

目標の⑴は，中教審答申の「地理総合」に関わる科目構成の見直しにおいて求められた趣旨を反映したものである。「理解する」ことについては，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，地理的な課題の解決に向けて構想したりする学習過程を前提に，世界の生活文化の多様性や，防災，地域や地球的課題への取組などを理解することを意味している。また，ここで身に付ける「技能」としては，情報を収集する技能，情報を読み取る技能，情報をまとめる技能の三つの技能に分けて考えることができる。これらについて地理学習に即して言えば，多種多様な資料を容易に得ることができる中で課題の解決に有用な情報を適切に収集したり，社会的事象を位置や空間的な広がりなどを考慮して地図上で捉えたり，地理情報を地図にまとめて主題図を作成したりするなどの地理的技能をしっかり身に付けるよう工夫することも大切である。

> ⑵　地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を，位置や分布，場所，人間と自然環境との相互依存関係，空間的相互依存作用，地域などに着目して，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，地理的な課題の解決に向けて構想したりする力や，考察，構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。

目標の⑵における「位置や分布，場所，人間と自然環境との相互依存関係，空間的相互依存作用，地域」については，国際地理学連合・地理教育委員会によって地理教育振興のためのガイドラインとして制定された地理教育国際憲章(1992)において，地理学研究の中心的概念として示されているものである。これらの視点に着目することで，社会的事象を「地理に関わる事象」，すなわち地理的な事象として見いだしたり，社会に見られる課題を「地理的な課題」として考察，構想したりすることを可能にするものである。また，これらの視点は，社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせた具体的な授業の中で，主要な問いとしても用いられるものである。

⑶　地理に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究，解決しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚，我が国の国土に対する愛情，世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとすることの大切さについての自覚などを深める。

目標の⑶中の「態度」を養うためには，現代世界に関する様々な地理的な事象を取り扱う地理学習の特質を生かして，作業的で具体的な体験を伴う学習や課題を設定し追究する学習などを工夫し，生徒の社会参画意識の涵養を視野に主体的な学習を促すことが必要である。また，目標の⑶中の「愛情」や「自覚」などを深めるには，多面的・多角的な考察や深い理解を通した日々の学習の積み重ねによって涵養されるものであることに留意する必要がある。

⑵　内容

Ａ　地図や地理情報システムで捉える現代世界

この大項目は，「地理総合」の学習の導入として中学校までの学習成果を踏まえ，現代世界の地域構成を主な学習対象とし，その結び付きを地図や地理情報システム（Geographic Information System 以下，ＧＩＳ）を用いて捉える学習などを通して，汎用的な地理的技能を習得することを主なねらいとしている。

中項目⑴　地図や地理情報システムと現代世界

この中項目は，位置や分布などに関わる視点に着目して，現代世界の地域構成とともに地図やＧＩＳの活用の仕方を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，現代世界の地域構成の特色，地図やＧＩＳの役割や有用性などを理解し，そのために必要な技能を身に付けられるようにすることが求められている。この「地理総合」の導入部分に，現代世界の地域構成に関する学習を位置付けるのは，現代世界の地理的認識を深める際の座標軸の役割を果たすためであり，地図やＧＩＳに関する学習を位置付けるのは，作業的で具体的な体験を伴う学習によって地理学習の基礎的・基本的な技能を身に付けるとともに地理学習に対する意欲を高めるためである。

なお，ここで取り上げる「日本の位置と領域」については，竹島や北方領土が我が国の固有の領土であることなど，我が国の領域をめぐる問題も取り上げるようにし，尖閣諸島については我が国の固有の領土であり，領土問題は存在しないことも扱う。また，今後の学習全体を通じて地理的技能を活用する端緒となるよう，地図やＧＩＳに関する基礎的・基本的な知識や技能を習得するとともに，地図やＧＩＳが日常生活の様々な場面で持続可能な社会づくりのために果たしている役割やその有用性に気付くことができるよう工夫する。

ア　次のような知識及び技能を身に付けること。

(ｱ)　現代世界の地域構成を示した様々な地図の読図などを基に，方位や時差，日本の位置と領域，国内や国家間の結び付きなどについて理解すること。

(ｲ)　日常生活の中で見られる様々な地図の読図などを基に，地図や地理情報システムの役割や有用性などについて理解すること。

ここでは，様々な地図や地球儀を通して世界を概観する中で，世界的視野から四方を海に囲まれている我が国の位置を捉えたり，時差の存在が世界の人々の生活や経済活動などに影響を与えていることを理解したりすることなどが求められる。また，市街図や鉄道路線図などの生徒にとって身近に接する機会の多い地図を読図し実際の景観と比較することで，地図やＧＩＳが目的に応じて活用され，文字のみの情報では表現し得ない部分を担っていることを理解することなどが期待される。

(ｳ)　現代世界の様々な地理情報について，地図や地理情報システムなどを用いて，その情報を収集し，読み取り，まとめる基礎的・基本的な技能を身に付けること。

ここでの学習は，様々な主題図やＧＩＳで作成した地図などを取り上げ，今後の学習全体を通じて地理的技能を活用する端緒となるような技能を身に付けることだけではなく，中学校までの学習で身に付けた情報を収集し，読み取り，まとめるといった一連の学習活動における幅広い技能を指し，それらを活用するとと

もにその習熟を図ることも意味している。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ)　現代世界の地域構成について，位置や範囲などに着目して，主題を設定し，世界的視野から見た日本の位置，国内や国家間の結び付きなどを多面的・多角的に考察し，表現すること。

(ｲ)　地図や地理情報システムについて，位置や範囲，縮尺などに着目して，目的や用途，内容，適切な活用の仕方などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

ここでは，世界全体で捉えた場合と州・大陸規模，さらに国や国内地域規模で捉えた場合では，異なる視点が存在することなどに留意しつつ，主題に則した問いを立てて，ＧＩＳを活用し，可視化された情報を基に考察したり推察したりしたことを文章にまとめたり，作成された資料を基に発表したりするといった学習活動が考えられる。なお，ここで取り扱う地図やＧＩＳを活用すること自体が，思考力，判断力，表現力等を育む対象でもあり，目的や用途，内容に応じて適切な範囲または縮尺の地図を選ぶとともに，表示する内容によって地図表現を適切に選択することが大切である。

Ｂ　国際理解と国際協力

この大項目は，「地図や地理情報システムで捉える現代世界」の学習成果を踏まえ，世界の特色ある生活文化と地球的課題を主な学習対象とし，特色ある生活文化と地理的環境との関わりや地球的課題の解決の方向性を捉える学習などを通して，国際理解や国際協力の重要性を認識することを主なねらいとしている。よって，ここでは，網羅的な地域情報を取り上げるのではなく，あくまで世界の人々の特色ある生活文化に焦点を当てて，生活文化の多様性や変容の要因を考察するといった学習活動の位置付けを意図している。

中項目(1)　生活文化の多様性と国際理解

この中項目は，場所や人間と自然環境との相互依存関係などに関わる視点に着目して，世界の人々の生活文化を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，世界の人々の生活文化の多様性や変容，自他の文化を尊重し国際理解を図ることの重要性などを理解できるようにすることが求められている。なお，ここで取り上げる「世界の人々の特色ある生活文化」については，「地理的環境から影響を受けたり，影響を与えたりして多様性をもつこと」や，「地理的環境の変化によって変容すること」などを理解するために，世界の人々の多様な生活文化の中から地理的環境との関わりの深い，ふさわしい特色ある事例を選んで設定する。また，ここでは，生活と宗教の関わりなどについて取り上げるとともに，日本との共通点や相違点に着目し，多様な習慣や価値観などをもっている人々と共存していくことの意義に気付くよう工夫する。

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ)　世界の人々の特色ある生活文化を基に，人々の生活文化が地理的環境から影響を受けたり，影響を与えたりして多様性をもつことや，地理的環境の変化によって変容することなどについて理解すること。

(ｲ)　世界の人々の特色ある生活文化を基に，自他の文化を尊重し国際理解を図ることの重要性などについて理解すること。

ここでの学習の対象は，「地理的環境」との関わりにおいて育まれる人間の生活の営みであり，具体的には，衣食住を中心とする世界の人々の暮らしや，そこから生み出される慣習や規範，宗教などの主に生活様式に関わる事柄である。「地理的環境」については，地形，気候などの自然環境と，歴史的背景や産業の営みなどを反映した社会環境を意味している。現代世界では，グローバル化の進展により人々の交流が広域化，深化する一方，異なる習慣や価値観をもつ人々の間で相互理解の不足による摩擦や衝突が起きやすく，そうした課題解決のために，自他の文化を尊重し，国際理解を図ることの重要性を理解することが大切である。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ)　世界の人々の生活文化について，その生活文化が見られる場所の特徴や自然及び社会的条件との関わりなどに着目して，主題を設定し，多様性や変容の要因などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

ここでは，様々な「自然及び社会的条件」により人々の生活文化には多様性が見られ，「自然及び社会的条件」の変化に応じて生活文化も変容することなどに留意しつつ，自他の文化を尊重し国際理解を図ることの重要性などについて考察するよう，主題を設定することが大切である。

中項目(2)　地球的課題と国際協力

この中項目は，空間的相互依存作用や地域などに関わる視点に着目して，世界各地で見られる地球的課題を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，地球的課題の傾向性や課題相互の関連性を大観し，課題解決を目指した各国の取組や国際協力の必要性などを理解できるようにすることが求められてい

る。なお，ここで取り上げる地球的課題については，国際連合における持続可能な開発のための取組などを参考に，「地球的課題の各地で共通する傾向性や課題相互の関連性」などを理解するために，世界各地で見られる様々な地球的課題の中から，ふさわしい特色ある事例を選んで設定する。また，地球的課題の解決については，人々の生活を支える産業などの経済活動との調和のとれた取組が重要であり，それが持続可能な社会づくりにつながることに留意する。

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ)　世界各地で見られる地球環境問題，資源・エネルギー問題，人口・食料問題及び居住・都市問題などを基に，地球的課題の各地で共通する傾向性や課題相互の関連性などについて大観し理解すること。

(ｲ)　世界各地で見られる地球環境問題，資源・エネルギー問題，人口・食料問題及び居住・都市問題などを基に，地球的課題の解決には持続可能な社会の実現を目指した各国の取組や国際協力が必要であることなどについて理解すること。

ここでは，現代世界が抱えている多くの「地球的課題」の中で，地域性を踏まえて捉えることによって問題の所在や解決の方向性などがより明確になり，地理的に考察することが効果的な課題が示されており，それぞれの課題が世界においてどのような状況で見られ，他の課題とどのようなつながりがあるのかを，世界全体を見渡して地球的視野から捉えることが求められる。また，「持続可能な社会」を実現していくためには，各国の取組や国際協力が必要不可欠であるため，各国が解決に向けて独自に行っている取組とともに，温暖化防止条約などの国際協力を具体的に取り上げ，各国の取組や国際協力の意義や必要性などについて理解することが大切である。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ)　世界各地で見られる地球環境問題，資源・エネルギー問題，人口・食料問題及び居住・都市問題などの地球的課題について，地域の結び付きや持続可能な社会づくりなどに着目して，主題を設定し，現状や要因，解決の方向性などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

ここでは，「地球的課題」が国境や地域を越えて人類が協力して取り組むべき課題であることから，その解決に向けた地域や国家間の協力といった結び付きや，適切な生活環境を未来も持続していくといった社会づくりに留意して，主題に則した問いを立てる必要がある。

C　持続可能な地域づくりと私たち

この大項目は，「地図や地理情報システムで捉える現代世界」及び「国際理解と国際協力」の学習成果を踏まえ，国内外の防災や生活圏の地理的な課題を主な学習対象とし，地域性を踏まえた課題解決に向けた取組の在り方を構想する学習などを通して，持続可能な地域づくりを展望することを主なねらいとしている。

中項目(1)　自然環境と防災

この中項目は，人間と自然環境との相互依存関係や地域などに関わる視点に着目して，地域性を踏まえた防災を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，自然環境の特色と防災との関わりや，地域性を踏まえた防災の重要性などを理解し，そのために必要な技能を身に付けられるようにすることが求められている。なお，ここでは，日本は変化に富んだ地形や気候をもち，様々な自然災害が多発することから，早くから自然災害への対応に努めてきたことなどを，具体例を通して取り扱う。その際，地形図やハザードマップなどの主題図の読図など，日常生活と結び付いた地理的技能を身に付けるとともに，防災意識を高めるよう工夫する。「我が国をはじめ世界で見られる自然災害」及び「生徒の生活圏で見られる自然災害」については，それぞれ地震災害や津波災害，風水害，火山災害などの中から，適切な事例を取り上げる。

ア　次のような知識及び技能を身に付けること。

(ｱ)　我が国をはじめ世界で見られる自然災害や生徒の生活圏で見られる自然災害を基に，地域の自然環境の特色と自然災害への備えや対応との関わりとともに，自然災害の規模や頻度，地域性を踏まえた備えや対応の重要性などについて理解すること。

ここで求められるのは，地震災害，津波災害，風水害，火山災害など取り上げる中で，これらの自然災害と地形や気候，土地利用との関係性や，我が国の自然環境が世界的に見ても自然災害に結び付きやすいことなどを理解することである。特に，生徒が居住する地域やその周辺で過去に発生した自然災害について取り上げ，災害を引き起こす自然現象（ハザード）の規模や頻度，災害発生の仕組みなどに関する知識を身に付けることが大切である。また，それらの状況を総合的に勘案して自然災害の被害をできる限り低く抑えるための備えや対応の重要性を理解する一方で，それらによっても自然災害を完全に防ぐことは困難であり，自然災害の危険が解消したかのような印象を与えないこ

とに留意する必要がある。

(ｲ) 様々な自然災害に対応したハザードマップや新旧地形図をはじめとする各種の地理情報について，その情報を収集し，読み取り，まとめる地理的技能を身に付けること。

ここでは，地方公共団体の作成した既存の「ハザードマップ」や，「新旧地形図」や土地の状態を示す様々な地理情報から，どのような自然災害がどのような場所で発生しやすいのかを，地形や土地利用の変化に留意してその特色を見いだすことや，洪水や土砂災害などの危険がある場所や避難場所や避難経路の立地と安全性を評価することが期待される。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ) 地域性を踏まえた防災について，自然及び社会的条件との関わり，地域の共通点や差異，持続可能な地域づくりなどに着目して，主題を設定し，自然災害への備えや対応などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

ここでは，自然災害が地域の自然環境と人間活動の関わりによってその危険性が変動することから，そのことを踏まえた両者の関わり，各地域の防災上の共通点や差異，さらには持続可能な地域づくりに向けた取組といった視点に留意しつつ，主題に則した問いを立てて，それぞれの学習を関連付けながら，自らの課題として考えを深化させるといった学習展開が考えられる。

中項目⑵　生活圏の調査と地域の展望

この中項目は，空間的相互依存作用や地域などに関わる視点に着目して，生活圏の地理的な課題を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，地理的な課題の解決に向けた取組や探究する手法などを理解できるようにすることが求められている。なお，ここで取り上げる「生活圏の調査」については，その指導に当たって，これまでの学習成果を活用しながら，生徒の特性や学校所在地の事情などを考慮して，地域調査を実施し，生徒が適切にその方法を身に付けるよう工夫する。

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ) 生活圏の調査を基に，地理的な課題の解決に向けた取組や探究する手法などについて理解すること。

ここでは，生徒が生活圏に見られる課題を自ら設定し，情報の収集，整理・分析を行って，立てられた仮説を検証してまとめる一連の活動の中で，新たな発見や理解の深化を見いだし，改めて仮説や場合によっては課題を設定し直し，情報の収集，整理・分析を行っていくというスパイラルする学習の姿を想定している。「地理総合」のまとめとなるこの中項目の学習は，生活圏の課題の解決に向けた取組を考察，構想することで，日本や世界の諸課題を考察し，日本の国土像を探究する「地理探究」での学習とも結び付く位置付けとなる。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ) 生活圏の地理的な課題について，生活圏内や生活圏外との結び付き，地域の成り立ちや変容，持続可能な地域づくりなどに着目して，主題を設定し，課題解決に求められる取組などを多面的・多角的に考察，構想し，表現すること。

「生活圏の地理的な課題」については，当該地域に見られる人口の高齢化，災害とその対策，地域の経済振興，地域文化の継承，環境の保全，国際化と異文化への理解や共生など多様な課題が考えられる。対象となる生活圏の様子だけでなく関連する生活圏外の地域との結び付きに着目したり，課題を課題として終わらせるのではなく，その解消，改善を視野に地域社会の持続性に着目したりする視点に留意することが大切である。また，地域社会に生起する課題の中から，当該生活圏に顕在化する身近な課題，生徒自身が取り組みやすい課題などの条件を考慮して，主題を設定する必要がある。

２　「地理探究」

⑴　性格及び目標

ア　性格

「地理探究」は，必履修科目の「地理総合」の学習で身に付けた資質・能力を基に，系統地理的な考察，地誌的な考察によって習得した知識や概念を活用し，現代世界に求められるこれからの日本の国土像を探究する科目である。生徒一人一人を生涯にわたって探究を深める未来の創り手として育むという観点から，「日本史探究」「世界史探究」とともに設置された選択科目である。

イ　目標

「地理探究」の目標は，地理歴史科の目標構成と同様，柱書として示された目標と，「知識及び技能」，「趣向力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の資質・能力の三つの柱に沿った，それぞれ⑴から⑶までの目標から成り立っている。

柱書については「地理総合」と同じものとなっているので，そちらを参照されたい。

⑴　地理に関わる諸事象に関して，世界の空間的な諸事象の規則性，傾向性や，世界の諸地域の地域的特色や課題などを理解するとともに，地図や地理情報システムなどを用いて，調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
⑵　地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を，位置や分布，場所，人間と自然環境との相互依存関係，空間的相互依存作用，地域などに着目して，系統地理的，地誌的に，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，地理的な課題の解決に向けて構想したりする力や，考察，構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。
⑶　地理に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に探究しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚，我が国の国土に対する愛情，世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとすることの大切さについての自覚などを深める。

目標の⑴～⑶についても，⑴で「世界の空間的な諸事象の規則性，傾向性や，世界の諸地域の地域的特色や課題」，⑵で「系統地理的，地誌的に」，⑶で「探究」と「地理探究」の性格を示す文言が入っているが，その他は「地理総合」と同じとなっている。

なお，⑶に「探究」と記されていることは，現代世界に関する様々な地理的な事象に生徒自らが関心をもって学習に取り組むことができるようにするとともに，学習を通してさらに関心が喚起されるよう指導を工夫する必要性を示している。

⑵　内容

A　現代世界の系統地理的考察

この大項目は，現代世界における地理的な諸事象を主な学習対象とし，その空間的な規則性，傾向性や関連する課題の要因を捉えるなどの学習を通して，現代世界の諸事象の地理的認識とともに，系統地理的な考察の手法を身に付けることを主なねらいとしている。取扱いにあたっては，「分析，考察の過程を重視し，現代世界を系統地理的に捉える視点や考察方法が身に付くよう工夫すること」に留意する。系統地理的に考察する際の手順として，①取り上げる事象を決める段階，②取り上げた事象に関する分布図，地域区分図，類型地域の分布図などを読み取る段階，③そうして読み取った分布の特色や規則性，傾向性などを分析する段階，④事例として取り上げた気候変動なら気候変動という事象の特色が各地域内で他の事象とどのように関連し合って生み出されたのかについて考察する段階，といった一連の考察の過程が考えられる。

中項目⑴　自然環境

この中項目は，場所や人間と自然環境との相互依存関係などに関わる視点に着目して，自然環境に関わる諸事象を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，自然環境に関わる諸事象の空間的な規則性，傾向性や，関連する地球的課題の現状や要因，解決に向けた取組などを理解できるようにすることが求められている。その際，「地理総合」の内容のCの中項目⑴の自然環境と防災における学習を踏まえ，「地理総合」を深化させて学習することに留意する。

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ) 地形，気候，生態系などに関わる諸事象を基に，それらの事象の空間的な規則性，傾向性や，地球環境問題の現状や要因，解決に向けた取組などについて理解すること。

ここでは，地形，気候，生態系，さらに自然災害や気候変動，生態系の破壊や環境変動などが地域的に異なる形で現れながらも関連しているといった空間的な規則性，傾向性を取り扱う。また，地球環境問題を基に，気候変動や環境変動による自然災害の激甚化，多発化などの地球規模の課題を捉え，世界の人々はどのように対応しようとしているのか，どうするべきなのかについて，現状や要因，解決の方向性を含めて理解する必要がある。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ) 地形，気候，生態系などに関わる諸事象について，場所の特徴や自然及び社会的条件との関わりなどに着目して，主題を設定し，それらの事象の空間的な規則性，傾向性や，関連する地球的課題の要因や動向などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

着目する視点として，例えば，取り上げる場所の特徴的な自然景観に着目したり，自然環境を構成する地形，気候，生態系などに関わる諸事象を人間活動との関わりに着目したりして，人間は，どのように自然の恩恵を求め，どのように自然に働きかけるべきかなどに留意することが大切である。

主題や問いの設定について，生徒や学校，地域の実態などを踏まえて様々な工夫が考えられる。また，学

習活動において，「地理総合」を含めたこれまでの学習を通して鍛えてきた，社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ，多面的・多角的に考察し，表現するとともに，同じくこれまでの学習を通して身に付けてきた，知識や地理的技能を活用することが大切であり，以降の大項目，中項目を含めた全ての学習活動を通して必須の要件である。

中項目⑵　資源，産業

この中項目は，場所や空間的相互依存作用などに関わる視点に着目して，資源，産業に関わる諸事象を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，資源，産業に関わる諸事象の空間的な規則性，傾向性や，関連する地球的課題の現状や要因，解決に向けた取組などを理解できるようにすることが求められている。ここで扱う事象は，技術革新や世界経済の動向などによって変化することから，社会の動きを踏まえて取り上げる事象を適切に選定する必要がある。また，新たな資源やエネルギー，産業は，テレビや新聞などのニュースとして取り上げられることも多いことから，生徒の興味・関心を喚起するためにも，これらの新たな動向についても注視し，適宜適切に取り扱うことも大切である。

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ) 資源・エネルギーや農業，工業などに関わる諸事象を基に，それらの事象の空間的な規則性，傾向性や，資源・エネルギー，食料問題の現状や要因，解決に向けた取組などについて理解すること。

ここでは，主な地下資源の分布，農業地域の分布，工業立地とその変化などについての空間的な規則性，傾向性を取り扱う。そして，資源・エネルギー，食料の生産と消費などに関わる問題について，現状や要因，解決の方向性を含めて理解する必要がある。また，これらの問題については，地域によって多様な状況や異なる課題が認められることから，世界的視野と地域的視野の両面から学習を進める必要がある。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ) 資源・エネルギーや農業，工業などに関わる諸事象について，場所の特徴や場所の結び付きなどに着目して，主題を設定し，それらの事象の空間的な規則性，傾向性や，関連する地球的課題の要因や動向などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

着目する視点として，例えば，酪農について取り上げる場合，酪農が行われている地域間での，気候や地形などの自然条件やその国の経済の状況などの社会的条件における共通点や相違点，酪農地域と生産される酪製品の消費地との結び付き，酪農地域の変容などに留意することが大切である。

中項目⑶　交通・通信，観光

この中項目は，場所や空間的相互依存作用などに関わる視点に着目して，交通・通信，観光に関わる諸事象を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，交通・通信，観光に関わる諸事象の空間的な規則性，傾向性や，関連する地球的課題の現状や要因，解決に向けた取組などを理解できるようにすることが求められている。

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ) 交通・通信網と物流や人の移動に関する運輸，観光などに関わる諸事象を基に，それらの事象の空間的な規則性，傾向性や，交通・通信，観光に関わる問題の現状や要因，解決に向けた取組などについて理解すること。

ここでは，交通網，通信網の地域による分布，密度の違いや，観光地の立地やそこを訪れる観光客の動向などの規則性，傾向性を取り扱う。また，現代社会における交通・通信，観光に関わる問題について，現状や要因，解決の方向性を含めて理解する必要がある。なおここで扱う事象は，道路や線路，港湾，空港，通信施設などの施設とともに，自動車や鉄道，船舶や航空機といった交通機関や通信手段を介した貿易や情報通信ネットワークなどの結び付きなどに関わる諸事象を取り扱う。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ) 交通・通信網と物流や人の移動に関する運輸，観光などに関わる諸事象について，場所の特徴や場所の結び付きなどに着目して，主題を設定し，それらの事象の空間的な規則性，傾向性や，関連する地球的課題の要因や動向などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

着目する視点として，例えば，交通・通信網と物流や人の移動に関する運輸，観光に関わる諸事象が，なぜそこで見られるのか，なぜ他の場所でも見られるのか，あるいは見られないのかといった場所の共通点や相違点の比較によって捉えたり，他の場所とどのような関わりがあるのか，あるいは無いのかといった他の場所における事象との結び付きによって捉えたりすることに留意することが大切である。

中項目⑷　人口，都市・集落

この中項目は，場所や空間的相互依存作用などに関わる視点に着目して，人口，都市・村落に関わる諸事象を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，人口，都市・村落に関わる諸事象の空間的な規則性，傾向性や，関連する地球的課題の現状や要因，解決に向けた取組などを理解できるようにすることが求められている。その際，人口，居住・都市問題への対応は，国や地方公共団体による取組が重要な役割を担っていることから，人口，居住・都市問題について追究する際には，地方自治などについて中学校社会科公民的分野で学習した内容を踏まえたり，高等学校公民科で学習する内容と連携を図ったりすることが大切である。

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ) 人口，都市・村落などに関わる諸事象を基に，それらの事象の空間的な規則性，傾向性や，人口，居住・都市問題の現状や要因，解決に向けた取組などについて理解すること。

ここでは，人口増減や人口分布，人口構成の変化などに見られる規則性，傾向性，集落の立地や携帯の一般的な共通性や地域性，都市の変容の規則性，傾向性を理解し，また，現代世界に見られる人口の不均衡な分布や年齢構成の不均衡，都市化の進展などから生起する問題などについて，世界的視野といった空間的な広がりに留意して，現状や要因，解決の方向性を含めて理解する必要がある。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ) 人口，都市・村落などに関わる諸事象について，場所の特徴や場所の結び付きなどに着目して，主題を設定し，それらの事象の空間的な規則性，傾向性や，関連する地球的課題の要因や動向などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

着目する視点として，例えば，学習対象として人口を取り上げる場合には，世界の人口の分布やその要因を考察したり，世界各国や地域に見られる人口構成の変化について考察したりすることに留意することが大切である。その際，それぞれの事象について，それが見られる場所はどのような場所なのか，それぞれの場所の自然及び社会的条件からどのような影響を受けるのか，地域内の結び付きによってどのように変化するのか，なぜそのような地域的な広がりを見せるのかなどを問うことで，人口，都市・村落に関わる事象の一般的な共通性や地域性を追究し，空間的な規則性，傾向性について考察することが大切である。

中項目⑸　生活文化，民族・宗教

この中項目は，場所や空間的相互依存作用などに関わる視点に着目して，生活文化，民族・宗教などに関わる諸事象を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，生活文化，民族・宗教などに関わる諸事象の空間的な規則性，傾向性や，関連する地球的課題の現状や要因，解決に向けた取組などを理解できるようにすることが求められている。

ここで取り上げる生活文化については，「地理総合」の内容のＢの中項目⑴の生活文化の多様性と国際理解における学習を踏まえて取り上げる事象を工夫すること。また，「領土問題の現状や要因，解決に向けた取組」については，それを扱う際に日本の領土問題にも触れること。また，我が国の海洋国家としての特色と海洋の果たす役割を取り上げるとともに，竹島や北方領土が我が国の固有の領土であることなど，我が国の領域をめぐる問題も取り上げるようにすること。その際，尖閣諸島については我が国の固有の領土であり，領土問題は存在しないことも扱う。

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ) 生活文化，民族・宗教などに関わる諸事象を基に，それらの事象の空間的な規則性，傾向性や，民族，領土問題の現状や要因，解決に向けた取組などについて理解すること。

ここでは現代世界に見られる民族や領土をめぐる問題に関わり個々の事象を詳細に捉えるのではなく，世界的視野といった空間的な広がりに留意してその動向を捉え，世界の生活文化，民族・宗教に関わる諸事象と民族，領土問題の関連を踏まえて，その現状や要因，解決の方向性を含めて理解する必要がある。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ) 生活文化，民族・宗教などに関わる諸事象について，場所の特徴や場所の結び付きなどに着目して，主題を設定し，それらの事象の空間的な規則性，傾向性や，関連する地球的課題の要因や動向などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

着目する視点として，例えば，特徴的な生活文化について，それが見られる場所の地理的環境との関わりや，それに影響を与えたり，影響を受けたりする個々の事象の地域的な結び付きや広がりから捉えることに留意することが大切である。

B　現代世界の地誌的考察

この大項目は，現代世界を構成する諸地域を学習対象とし，選択した地域の地域性と諸課題を捉える学習などを通して，現代世界の諸地域の地理的認識を深めるとともに，現代世界の諸地域を地誌的に考察する方法を身に付けることをねらいとしている。

中項目(1)　現代世界の地域区分

この中項目は，位置や分布，地域などに関わる視点に着目して，世界や世界の諸地域の地域区分を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，地域区分の方法や地域の概念，地域区分の意義などを理解し，そのために必要な技能を身に付けられるようにすることが求められている。取扱いにあたっては，現代世界が自然，政治，経済，文化などの指標によって様々に地域区分できることに着目し，それらを比較対照することによって，地域の概念，地域区分の意義などを理解できるようにする。

ア　次のような知識及び技能を身に付けること。

(ｱ) 世界や世界の諸地域に関する各種の主題図や資料を基に，世界を幾つかの地域に区分する方法や地域の概念，地域区分の意義などについて理解すること。

ここで取り上げる主題図や資料には様々なものがあり，そこで用いられる地域区分の方法が一つではないこと，地域区分には目的があって目的によって異なる指標が用いられること，様々な指標を使って地域が区分されることが，ここでの学習の前提として位置付けられることを意味している。

(ｲ) 世界や世界の諸地域について，各種の主題図や資料を踏まえて地域区分をする地理的技能を身に付けること。

ここでは目的に応じて適切な主題図や資料を選択して使用することが大切であり，地域区分によって現代の世界を大観するとともに，それぞれの地域の地域性を理解できるよう，目的に応じて地域区分を行う技能を身に付けることを意味している。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ) 世界や世界の諸地域の地域区分について，地域の共通点や差異，分布などに着目して，主題を設定し，地域の捉え方などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

着目する視点として，例えば，ある指標を基に他と異なる共通した性質をもつ等質地域としての空間的なまとまりを見出すことなどに留意することが大切である。ここでは，ある指標に基づいて作成された地域区分と，他の指標に基づいて作成された地域区分を比較し，共通点や差異，分布の傾向性に着目して，多面的・多角的に考察し，その結果を表現できるようにすることが考えられる。また，この分布の傾向性については，地理的な事象の分布の粗密を調べることで，中心と周辺からなる機能地域としての圏構造を見出すことなどが考えられる。

中項目(2)　現代世界の諸地域

この中項目は，空間的相互依存作用や地域などに関わる視点に着目して，現代世界の諸地域や地球的課題を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，区分した諸地域に見られる地域的特色や地球的課題，地域の結び付き，構造や変容などを地誌的に考察する方法を理解できるようにすることが求められている。取扱いにあたっては，中学校社会科地理的分野の「世界の諸地域」の学習における主に州を単位とする取り上げ方とは異なり，学習した地域区分を踏まえるとともに，様々な規模の地域を世界全体から偏りなく取り上げるようにすること。また，静態的な方法（取り上げた地域の多様な事象を項目ごとに整理して考察）や動態的な方法（取り上げた地域の特色ある事象と他の事象を有機的に関連付けて考察），二つの地域を比較する方法（対照的又は類似的な性格の二つの地域を比較して考察）といった三つの地誌の考察方法を用いて学習できるように工夫する。

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ) 幾つかの地域に区分した現代世界の諸地域を基に，諸地域に見られる地域的特色や地球的課題などについて理解すること。

地球的課題は地域によって多様な状況や異なる課題が認められ，地域的特色を踏まえて考察することが効果的であり，そうした地球的課題についての理解が現代世界の地理的認識を深めることにも効果的である。その際，「地域的特色や地球的課題」についての理解をより深める上で必要であれば，地理の総合性に留意して他の諸科学の成果なども活用しながら現代世界の地理的認識を深めるよう工夫することが大切である。

(ｲ) 幾つかの地域に区分した現代世界の諸地域を基に，地域の結び付き，構造や変容などを地誌的に考察する方法などについて理解すること。

地域は，グローバル化する国際社会において，地域的，国家的，あるいは国際的な結び付きによって相互に影響し合うとともに，地域に見られる様々な地理的

な事象は他の事象と構造的に結び付いて意味をなしており，それらは時代とともに変化するものと変化しないものがあるということに留意する必要がある。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ) 現代世界の諸地域について，地域の結び付き，構造や変容などに着目して，主題を設定し，地域的特色や地球的課題などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

着目する視点として，例えば，グローバル化する国際社会における地域的，国家的，あるいは国際的な結び付きや，自然環境，資源，産業，交通・通信，観光，人口，都市・村落，生活文化，民族・宗教などの諸事象が，規則性，傾向性をもちながら構造的に結び付いていること，また，それらは時代とともに変化するものがあることなどに留意することが大切である。地域の景観や諸事象の変化のみにとらわれることなく，時代の趨勢や大きな出来事などを踏まえながら，地域的，国家的，あるいは国際的な地域の結び付き，地理的な事象の結び付きやその変容などに留意して，自然，政治，経済，文化などの指標を踏まえて多面的･多角的に考察することが大切である。

また，ここでの学習では，適切な地域区分を基に取り上げた地域を地誌的に考察し，地域的特色や地球的課題を理解することにふさわしい主題を，地域の結び付き，構造や変容などに着目して設定することが大切である。

C　現代世界におけるこれからの日本の国土像

この大項目は，この科目のまとめとして位置付けられており，これまでの学習成果を踏まえ，現代世界における日本の国土を学習対象とし，我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方を構想する学習などを通して，持続可能な国土像を探究することをねらいとしている。取扱いにあたっては，国際連合が定めた持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）などを参考に，生徒自身が「地球的視野で考え，様々な課題を自らの課題として捉え，身近なところから取り組み（think globally, act locally），持続可能な社会づくりの担い手となる」ことにつながるよう，生徒の興味・関心などを踏まえて適切な事例を選定し，学習できるよう工夫すること。その際，それぞれの課題が相互に関連し合うとともに，それらの現状や要因の分析，解決の方向性については，複数の立場や意見があることに留意する。

中項目(1)　持続可能な国土像の探究

この中項目は，空間的相互依存作用や地域などに関わる視点に着目して，現代世界におけるこれからの日本の国土像を多面的・多角的に探究し，表現する力を育成するとともに，我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方などを構想することの重要性や，探究する手法などを理解できるようにすることが求められている。

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ) 現代世界におけるこれからの日本の国土像の探究を基に，我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方などを構想することの重要性や，探究する手法などについて理解すること。

日本が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や望ましい国土の在り方について，地球規模の視野で，複数の立場や意見を踏まえて，持続可能な社会づくりのために構想することの重要性を理解することや，自ら課題を設定し，情報の収集，整理・分析を行って，立てられた仮説を検証して構想しまとめる一連の活動の中で，新たな発見や理解の深化を見いだし，改めて仮説や場合によっては課題を設定し直し，情報の収集，整理・分析を行っていくというスパイラルする主体的な学習活動である探究の手法を理解する。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ) 現代世界におけるこれからの日本の国土像について，地域の結び付き，構造や変容，持続可能な社会づくりなどに着目して，主題を設定し，我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方などを多面的・多角的に探究し，表現すること。

着目する視点として，例えば，交通・通信網といった社会資本の整備やその活用に関わる「地域の結び付き」や，都市圏や通勤圏などの「地域構造」，人口や産業の構造の変化がもたらす「地域変容」，自然環境と人々の生活との関わりが影響し合う「持続可能な社会づくり」などの視点に留意することが大切である。

学習を進めるに当たって，我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方について，生徒が自己の興味・関心などを踏まえて適切な課題を選定し，社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせて探究し，表現する学習活動になるよう，主題を設定することが重要である。とりわけ，科目のまとめとなるこの中項目においては，「持続可能な社会づくり」に着目した主題の設定が大切である。また，一連の探究し，表現する学習活動においては，地理的環境が大

きく変化しつつある現代世界の中で，在るべき国づくりや地域づくりを考察し，その実現を阻害する課題を発見する力や解決する力を育むことも求められる。

３　「歴史総合」

⑴　性格及び目標

ア　科目の性格

「歴史総合」は，地理歴史科の中に設けられた標準単位数２単位の必履修科目であり，「地理総合」と相互補完的な役割を果たしながら地理歴史科の目標を達成する。近現代の歴史の変化に関わる諸事象について，世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉え，資料を活用しながら歴史の学び方を習得し，現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察，構想する科目として，今回の改訂において新たに設置された。

イ　目標

「歴史総合」の目標は，地理歴史科の目標構成と同様に，柱書として示された目標と，「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の資質・能力の三つの柱に沿ったそれぞれ⑴から⑶までの目標から成り立っている。そして，これら⑴から⑶までの目標を有機的に関連付けることで，柱書として示された目標が達成されるという構造になっている。

> 社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

柱書として示された目標では，「歴史総合」の学習において，主体的・対話的で深い学びを実現するために，課題を設定し，その課題の追究のための枠組みとなる多様な視点に着目し，課題を追究したり解決したりする活動が展開するように学習を設計することが不可欠であることが示されている。

> ⑴　近現代の歴史の変化に関わる諸事象について，世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉え，現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解するとともに，諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

目標の⑴は，「歴史総合」の学習を通じて育成される資質・能力のうち，「知識及び技能」に関わるねらいを示している。

「歴史総合」の学習の中心は，世界とその中の日本の相互作用や，それぞれの独自性，互いの共通性などの諸点から，世界とその中における日本の過去と現在を考察することにあり，現代的な諸課題の形成に深く，直接的に関わっていると考えられる近現代の歴史を考察することで，世界とその中の日本に存在する様々な課題についての歴史的な経緯を理解することが目指されている。また，課題の解決に向けて必要な社会的事象に関する情報を収集する技能，収集した情報を社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせて読み取る技能，読み取った情報を課題の解決に向けてまとめる技能を身に付けることが目指されている。その際，小学校や中学校の社会科での学習を踏まえ，生徒が身に付けた技能を繰り返し活用して習熟を図るように指導することが大切である。

> ⑵　近現代の歴史の変化に関わる事象の意味や意義，特色などを，時期や年代，推移，比較，相互の関連や現在とのつながりなどに着目して，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や，考察，構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。

目標の⑵は，「歴史総合」の学習を通じて育成される資質・能力のうち，「思考力，判断力，表現力等」に関わるねらいを示している。

ここでは，「歴史総合」において養われる思考力，判断力を，社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせて，歴史に関わる事象の意味や意義，特色，事象相互の関連を多面的・多角的に考察する力，歴史に見られる課題を把握して，学習したことを基に複数の立場や意見を踏まえ，その解決を視野に入れて構想できる力と捉えることが示されている。

> ⑶　近現代の歴史の変化に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に追究，解決しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚，我が国の歴史に対する愛情，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

目標の⑶は，「歴史総合」の学習を通じて育成される資質・能力のうち，「学びに向かう力，人間性等」に関わるねらいを示している。

教科目標に「地理や歴史に関わる諸事象について，

よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養う」と示されたことを受けて，歴史に関わる諸事象について，生徒自らが関心をもって学習に取り組むことができるようにするとともに，学習を通してさらに関心が喚起されるよう指導を工夫する必要性が示されている。また，そうした学習を通して「涵養される日本国民としての自覚，我が国の歴史に対する愛情，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚」を深め，「学びに向かう力・人間性等」を養うことを示されている。

⑵　内容

①大項目の構成

「歴史総合」は，現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察,構想する科目である。そのために，歴史を学ぶ意義や歴史の学び方を考察する大項目Ａ「歴史と私たち」と，近現代の歴史の大きな変化に着目した大項目Ｂ「近代化と私たち」，大項目Ｃ「国際秩序」の変化や大衆化と私たち」，大項目Ｄ「グローバル化と私たち」の四つの大項目によって構成されている。

ＡからＤの大項目はそれぞれが内容のまとまりであると同時に，相互に関係性をもっており，この順序で学習することになっている。また，科目全体のまとめとなっているＤの⑷の学習が充実するように，年間指導計画に基づいて，内容のつながりに留意した指導計画の作成を行うことが大切である。

②中項目の構成

大項目Ａ「歴史の扉」は，「⑴歴史と私たち」，「⑵歴史の特質と資料」の二つの中項目で構成されている。⑴では，日常生活や身近な地域などに見られる諸事象が，時間的な推移や空間的な結び付きの中で歴史とつながっていることを，⑵では資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解できるようにする。

また，大項目Ｂ，Ｃ及びＤでは，社会的事象の歴史的な見方・考え方や資料の取扱いに関する基本的な技能を活用して，生徒が資料から課題を見いだし，自ら学習を深めることができるように，それぞれ中項目⑴から⑷が設定されている。

中項目⑴では，生徒にとって身近な生活の社会の変化を表す資料を取り上げて，情報を読み取ったりまとめたりして資料を活用する技能を身に付けるとともに，歴史の大きな変化に伴う生活や社会の変容について考察し，問いを表現する。

中項目⑵及び⑶では，主題を設定し，生徒の課題意識を深めたり，新たな課題を見いだしたりすることができるように，資料を活用して課題を考察する。主題の設定に当たっては，中項目⑴の生徒が表現した問いを踏まえ，学習のねらいに則した考察を導くように留意する。それらの主題を，学習上の課題とするために問いを設定することで，現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史の理解を深める学習が考えられる。

大項目Ｂ及びＣの中項目⑷では，中項目⑴から⑶までの学習内容を踏まえ，「自由・制限」，「平等・格差」，「対立・競争」，「統合・分化」，「開発・保全」など，現代的な諸課題形成に関わる歴史的な状況を考察するための観点を活用して主題を設定し，現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察し，表現する。

大項目Ｄの中項目⑷「現代的な諸課題の形成と展望」は，この科目のまとめとして位置付けられている。これまでの学習の成果を活用し，生徒が持続可能な社会の実現を視野に入れ，主題を設定し，歴史的な経緯を踏まえた現代的な諸課題の理解とともに，諸資料を活用して探究する活動を通し，その展望などについて考察，構想し，それを表現できるようにする。

③小項目の設定

大項目Ｂ，Ｃ及びＤの中項目⑵及び⑶の学習は，小項目である「ア　知識及び技能（「次のような知識を身に付けること」と提示される）」と「イ　思考力，判断力，表現力等（「次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること」と提示される）」から構成されている。ここでは，大項目Ｃ「国際秩序の変化や大衆化と私たち」の中項目⑵「第一次世界大戦と大衆社会」のア(ｲ)とイ(ｲ)で構成される小項目を例に,「歴史総合」の学習内容と学習過程の構造について以下に示す。

【小項目全体の構造の例】

⑵　第一次世界大戦と大衆社会

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｲ)　＜a＞大衆の政治参加と女性の地位向上，大正デモクラシーと政党政治，大量消費社会と大衆文化，教育の普及とマスメディアの発達などを基に，＜b＞大衆社会の形成と社会運動の広がりを理解すること。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｲ)　＜c＞第一次世界大戦前後の社会の変化などに着目して，＜d＞主題を設定し，日本とその他の国や地域の動向を比較したり，関連付けたりするなどして，＜e＞第一次世界大戦後の社会の変容と社会運動との関連などを多面的・多角的に考察し，表現すること

例えば⑵のア(ｲ)とイ(ｲ)から構成される「⑵の小項目(ｲ)」の学習に当たっては，ア(ｲ)の＜a＞大衆の政治参加と女性の地位向上，大正デモクラシーと政党政治，大量消費社会と大衆文化，教育の普及とマスメディアの発達などを基に，イ(ｲ)の＜c＞第一次世界大戦前後の社会の変化などに着目し，教師が例えば，「大衆社会と社会運動」などの＜d＞主題を設定し，その主題を，「なぜ，1920 年代に大衆文化の影響が広範囲に及んだのだろうか」などの学習上の課題とするための「小項目全体に関わる問い」として設定して生徒に提示する。

この「小項目全体に関わる問い」を踏まえて，日本とその他の国や地域の動向を比較したり，関連付けたりするなどして，＜e＞第一次世界大戦後の社会の変容と社会運動との関連などを多面的・多角的に考察したり表現したりすることにより，ア(ｲ)の＜b＞大衆社会の形成と社会運動の広がりを理解することに至る学習の過程が考えられる。

つまり，アの事項の＜a＞を基に，イの事項の＜c＞に着目して，＜d＞主題を設定し，それに応じた「小項目全体に関わる問い」を学習上の課題として生徒に提示する。この「問い」を踏まえて＜e＞を考察し表現して，アの＜b＞の理解に至るという構造となっている。

④事象に関わる学習と問いの構造

小項目全体の説明の後に，＜a＞に示された複数の事象について，考察し表現するためのそれぞれの事象の取扱い方を以下のようにすることが考えられる。

大量消費社会と大衆文化については，欧米では 19 世紀後半から進んでいた第二次産業革命や科学技術の革新の流れが第一次世界大戦を機に一層加速し，産業構造の変化，大量生産・大量消費社会の到来，都市化の進行をもたらしたことなどについて扱う。さらに，このことを背景に，アメリカ的な生活様式や価値観の影響などから商業主義的な大衆文化が生まれたり，耐久消費財の発達を背景に近代的，合理的な生活様式が取り入れられたりしたことに触れ，生活の平準化・画一化が進んだことに気付くようにする。

【(ｲ)の＜a＞のうち，大量消費社会と大衆文化についての学習の展開例】

例えば，＜a＞の事象を学習する際に，主題を基にした「小項目全体に関わる問い」を踏まえ，「事象の推移や展開を考察し理解を促すための課題（問い）」（以下，「推移や展開を考察するための課題（問い）」）を設定し，さらに「事象を比較したり相互に関連付けたりして考察し理解を深めるための課題（問い）」（以下，「事象を比較し関連付けて考察するための課題（問い）」）を設定して考察の結果を表現するなど，段階的に課題（問い）を設定する学習が考えられる。以下は(ｲ)の＜a＞に示された事象のうち，大衆消費社会と大衆文化について，課題（問い）を設定した学習の例である。

例：大量消費社会と大衆文化について，課題（問い）を設定した学習

例えば，「大量生産や大量消費が人々の生活をどのように変えたのだろうか」などの，推移や展開を考察するための課題（問い）を教師が設定する。生徒は，当時の諸資料を活用しながら大量生産・大量消費が社会にもたらした影響について考察し，その特徴を理解する。

次に「あなたは，当時の社会や文化の変化のうち，その後の政治や経済に最も大きな 影響を与えたのは何だと考えるか，それはなぜか。」などの，事象を比較し関連付けて考察するための課題(問い)を設定し，都市的で画一化した生活様式や新中間層の成立，大衆社会の成立の背景や原因を多面的・多角的に考察し，表現する。

ここでは，具体的な課題（問い）については，各小項目の＜a＞の事象のうち一つのみの例を示している。例に示した事象以外についても，同様に段階的な課題(問い）を設定して学習することが大切である。

なお，ここに示された問いの例は，あくまでも参考であり，教師が，生徒の興味・関心や学校，地域の実態等に留意し，様々な状況に応じた工夫をすることが大切である。

⑤課題（問い）の設定と資料の活用

「歴史総合」では，学習全般において課題（問い）を設定し追究する学習が求められる。この学習において重要であるのは，第一に課題（問い）の設定であり，第二に課題（問い） の追究を促す資料の活用である。以下，それぞれに関する参考例を示す。

＜課題（問い）の設定の例＞

「事象の推移や展開を考察し理解を促すための課題（問い）」や，その考察を踏まえて設定される「事象を比較したり相互に関連付けたりして考察し理解を深めるための課題（問い）」などの具体例が考えられる。以下の問いは，「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を働かせて考察や構想に向かうための問いの例である。

○時系列に関わる問い

【時期や年代】

「それはいつの出来事だろうか，同じ時期に他の地域ではどのようなことが起こっていたのだろうか」

「その事象はどのような経緯で起こったのだろうか」

【過去の理解】
「当時の人々はなぜそのような選択をしたのだろうか（現代とはどのような異なる時代背景があったと考えられるだろうか）」
（【現在とのつながり】と共有される問い）
○諸事象の推移に関わる問い
【変化と継続】
「このことで何を変えようとしたのだろうか，何が変わったのだろうか，何が変わらなかったのだろうか」
「複数の諸事象の変化には，どのような違いがあるだろうか」
○諸事象の比較に関わる問い
【類似と差異】
「その事象と他の事象を比較すると，どのような共通点と相違点を見いだすことができるだろうか」
「その違いが生じたのはなぜだろうか」
（【背景や原因】と共有される問い）
「共通点に注目すると，どのような傾向が見いだせるだろうか」
（【意味や意義と特色】と共有される問い）
【意味や意義と特色（特徴）】
「その事象は，当時どのような意味を持っていたのだろうか」
「その事象は，違う立場から考えると，どのような意味があったと考えられるだろうか」
「他の生徒が考察したその事象の意義について，あなたはどう考えるか」
○事象相互のつながりに関わる問い
【背景や原因】
「なぜ，その事象は起こったのだろうか」
「この事象の背景にはどのような状況が存在したのだろうか」
「あなたは，その事象が起こった最も重要な要因とは何だと考えるか」
「あなたが学習した諸事象の中で，その事象と最も深いつながりがあると考えるのは何か，それはなぜか」
【影響や結果】
「同じ時期に共通する特徴をもった事象が複数起こったのはなぜだろうか」
「この事象の結果，どのような変化が生じたのだろうか」
「その事象は，社会全体にどのような影響を及ぼしたと考えられるだろうか」

○現在とのつながりに関わる問い
【歴史と現在】
「過去の事象と類似した現代の事象は何だろうか」
「現在の事象と，どのような点が関連しているのだろうか」
「どのようなことが現在につながる変化の要因として考えられるだろうか」
【歴史的な見通し，展望】
「この事象は，後の人々にどのような考えや課題をもたらすと考えられるか」
「（現在の）この事象は，過去の類似の事例を参考にすると，その後，どのような展開の可能性があると考えられるか」
「（現在の）この事象は，この後，どのような展開が望ましいと考えるか，それが実現されるためには，過去の事例を踏まえると，どのようなことが必要なのだろうか」
【自己との関わり】
「この事象を学ぶことは，あなたにとってどのような意味があると考えるか」

＜課題（問い）の追究を促す資料の活用の例＞

「歴史総合」では，学習全般において資料の活用が示されている。教師が生徒の資料活用の技能の習得を促すために，例えば以下のような発問を行うことが考えられる。
・「内容，登場する人物，日付や時期，資料の出典などから推察できる留意点は何だろうか」
・「資料に示された内容は，作成者が直接見聞きしたことか，伝聞か，仮説か，個人の感想か」
・「この資料中に描かれた説明の背後にはどのような意図があると考えられるだろうか」
・「示されている結論を導く資料はどれだろうか」
・「異なる主張の根拠とされる資料を比較し，その共通点と相違点を明らかにして，それぞれが主張する結論との関係を説明しよう」
・「この地図・年表の主題は何だろうか（何を示すために作成されたと考えられるだろうか）」
・「示された説明について，主張を補ったり，反論したりするためには，どのような資料の活用が考えられるだろうか」

⑥各項目について
ここでは，大項目Ｂの中項目⑴及び⑵を例として説明する。

Ｂ　近代化と私たち

この大項目では，産業社会と国民国家の形成を背景として，人々の生活や社会の在り方が変化したことを扱い，世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉えて考察し，現代的な諸課題の形成に関わる近代化の歴史を理解できるようにすることをねらいとしている。

⑴　近代化への問い

この中項目では，中学校までの学習を踏まえ，諸資料を活用して情報を読み取ったりまとめたりする技能を習得し，人々の生活や社会の在り方が近代化に伴い変化したことについて考察するための問いを表現することをねらいとしている。
交通と貿易，産業と人口，権利意識と政治参加や国民の義務，学校教育，労働と家族，移民などに関する資料を活用し，課題を追究したり解決したりする活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　次のような技能を身に付けること。
　(ｱ)　資料から情報を読み取ったりまとめたりする技能を身に付けること。
イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。
　(ｱ)　近代化に伴う生活や社会の変容について考察し，問いを表現すること。

学習に当たっては，取り上げた複数の資料を組み合わせて活用し，身近な生活と関わらせて課題意識を育み，情報を読み取ったりしてまとめたりして資料を活用する技能を習得しつつ，イ(ｱ)の近代化に伴う生活や社会の変容について考察し，その過程で生徒が見いだした疑問を問いで表現することで，この中項目のねらいを実現できるようにする。
（内容の取扱い）
中項目⑴については，中学校までの学習及びＡの学習を踏まえ，学習内容への課題意識をもたせるとともに，⑵，⑶及び⑷の学習内容を見通して指導すること。
交通と貿易を取り上げた場合を例に取り上げる。この場合は，例えば，貿易額や貿易品目の推移を示す資料，鉄道の敷設距離の推移や航路の拡大と所要日数の推移を示す資料，工場数の推移を示す資料などを提示し，鉄道や蒸気船の急速な普及の理由，貿易によって豊かになった国々の特徴など，生徒が歴史的な見方・考え方を働かせて資料を読み解くことができるように指導を工夫する。生徒は，それらの情報を読み取ったりまとめたりしながら，貿易の拡大による世界の結び付きなどについて考察する。

問いを表現するとは，近代化に伴い生活や社会が変化したことを示す資料から，情報を読み取ったりまとめたり，複数の資料を比較したり関連付けたりすることにより，生徒が興味・関心をもったこと，疑問に思ったこと，追究したいことなどを見いだす学習活動を意味している。歴史に対する驚きや素朴な問いが歴史学習の出発点であることを踏まえ，生徒が資料から読み取った歴史についての事象それ自体への問いを表現する中で，学習内容に対する生徒の課題意識を育むことが大切である。

⑵　結び付く世界と日本の開国

この中項目では，アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり，相互に関連付けたりするなどして，18 世紀の日本やその他のアジアにおける経済活動や社会の特徴，アジア各地域間の関係，アジア諸国と欧米諸国との関係などを考察し表現して，18 世紀のアジアの経済と社会を理解すること，アジア諸国と欧米諸国との関係の変容などを考察し表現して，工業化と世界市場の形成を理解することをねらいとしている。諸資料を活用し，課題を追究したり解決したりする活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。

【小項目(ｱ)】
ア　次のような知識を身に付けること。
　(ｱ)　18 世紀のアジアや日本における生産と流通，アジア各地域間やアジア諸国と欧米諸国の貿易などを基に，18 世紀のアジアの経済と社会を理解すること。
イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。
　(ｱ)　18 世紀のアジア諸国の経済が欧米諸国に与えた影響などに着目して，主題を設定し，アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり，相互に関連付けたりするなどし て，18 世紀のアジア諸国における経済活動の特徴，アジア各地域間の関係，アジア諸国と欧米諸国との関係などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

学習に当たっては，⑴で表現した学習への問いを踏まえて生徒の学習への動機付けや見通しを促しつつ，イ(ｱ)の 18 世紀のアジア諸国の経済が欧米諸国に与えた影響などに着目し，小項目のねらいに則した考察を導くための主題を設定する。その主題を，例えば，「18 世紀頃のアジアでは，どのように手工業製品が生産され，取引されていたのだろうか，なぜヨーロッパの人々

はそれらを求めたのだろうか」，「18 世紀頃のアジア諸国と欧米諸国との貿易や国際関係はどのように特徴付けられるだろうか」などの学習上の課題（小項目全体に関わる問い）として設定する。これを踏まえ，アジア諸国とその他の国家や地域の動向を比較したり，相互に関連付けたりするなどして，多面的・多角的に考察し表現することにより，18 世紀のアジアの経済と社会を理解する学習が考えられる。

（内容の取扱い）

⑵のアについては，日本の美術などのアジアの文物が欧米諸国に与えた影響に気付くようにすること。また，欧米諸国がアジア諸国に進出し，軍事力を背景に勢力拡張を目指した競争が展開され，アジアの経済と社会の仕組みが変容したことにも触れること。また，アジア貿易における琉球の役割，北方との交易をしていたアイヌについて触れること。その際，琉球やアイヌの文化についても触れること。

18 世紀のアジアや日本における生産と流通については，主にこの時期の中国と日本の動向を取り上げる。中国では，手工業とその技術が発展し，輸送網や金融システムの発達が見られ，都市を中心に活発な商取引が行われていたこと，日本でも幕藩体制下の安定した社会を背景として，年貢米や特産品などを河川舟運や海運によって大坂へ回漕するなど全国的な流通が展開し，各種の商品生産が行われたことなどを扱う。これらを踏まえ，18 世紀の日本を含むアジアについては，欧米諸国と異なる独自の経済・社会発展を遂げていたことに気付くようにする。

アジア各地域間やアジア諸国と欧米諸国の貿易については，18 世紀の東アジアにおける清の海禁，日本のいわゆる鎖国など，国家による管理貿易が行われており，その枠組みの中で，日本や中国，東南アジア各地で銅や海産物，森林産品，砂糖や書物，絹製品や陶磁器などが取引されていたことを扱う。これらを踏まえ，日本を含むアジア各地が相互に経済的に結び付いていたことに気付くようにする。

なお，北西ヨーロッパ諸国では中国の磁器やインドの綿織物への需要が高まり，アジアとの貿易は輸入が増加する一方で，輸出は伸張しなかったことに気付くようにする。

また，「アジア貿易における琉球の役割，北方との交易をしていたアイヌについて触れること。その際，琉球やアイヌの文化についても触れること」（内容の取扱い）については，琉球が中国・日本・東南アジア間の中継貿易の拠点として独自の文化を築いたことに触れるとともに，18 世紀の琉球と日本や清との関係について触れる。アイヌについては，北東アジアに広い貿易ネットワークを構築していたことなどについて触れるとともに，「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議（平成 20 年 6 月 6 日衆議院・参議院本会議）」，「アイヌ文化の復興等を促進するための民族共生象徴空間の整備及び管理運営に関する基本方針について（平成 26 年 6 月 13 日閣議決定（平成 29 年 6 月 27 日一部変更）」を踏まえ，先住民族として言語や宗教などで独自性を有するアイヌの人々の文化についても触れる。

上記の 18 世紀のアジアや日本における生産と流通，アジア各地域間やアジア諸国と欧米諸国の貿易の学習については，小項目の主題を基にした学習上の課題（小項目全体に関わる問い）を踏まえ，小項目のねらいに則した学習を展開することが大切である。そのため，推移や展開を考察するための課題（問い）を設定し，さらに事象を比較し関連付けて考察するための課題（問い）を設定するなど，事象それぞれの学習の際に，段階的に課題（問い）を設定することが求められる。

【小項目(ｲ)】

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｲ)　産業革命と交通・通信手段の革新，中国の開港と日本の開国などを基に，工業化と世界市場の形成を理解すること。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｲ)　産業革命の影響，中国の開港と日本の開国の背景とその影響などに着目して，主題を設定し，アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり，相互に関連付けたりするなどして，アジア諸国と欧米諸国との関係の変容などを多面的･多角的に考察し，表現すること。

学習に当たっては，⑴で表現した学習への問いを踏まえて生徒の学習への動機付けや見通しを促しつつ，イ(ｲ)の産業革命の影響，中国の開港と日本の開国の背景とその影響などに着目し，小項目のねらいに則した考察を導くための主題を設定する。その主題を，例えば，「イギリスに始まる産業革命は，世界各地の社会や経済をどのように変えたのだろうか。また，その変化は，アジア諸国と欧米諸国の関係をどのように変えたのだろうか」などの学習上の課題（小項目全体に関わる問い）として設定する。これを踏まえて，アジア諸国とその他の国家や地域の動向を比較したり，相互に関連付けたりするなどして，多面的・多角的に考察したり表現したりすることにより，工業化と世界市場の形成を理解する学習が考えられる。

産業革命と交通・通信手段の革新については，主にイギリスで，綿工業を中心に技術革新が起こったこと，それに伴って，工業生産の機械化・大規模化が起こったことなどを扱う。また，鉄道や蒸気船航路，電信網の発達により，原料や商品の大量輸送や情報伝達の迅速化が進み，世界各地の結び付きが強まり始め，欧米諸国の工業化を促していったことなどに気付くようにする。

中国の開港と日本の開国については，欧米諸国など工業化した国が，原材料および製品の市場を世界に求め，世界各地が貿易で結び付けられたこと，その中で中国では，欧米諸国により，開港場の増加や貿易制限の大幅な緩和が求められたこと，日本では，欧米諸国のアジア進出という国際情勢の中で，外交政策の転換である開国が大きな国内政治の変化と連動したこと，その後の対応を通じて日本でも産業革命がおこり，アジアの各地域間の貿易もその影響で大きく変容したことなどを扱う。また，アジアの物産や日本の美術などを例に，欧米諸国の生活・文化へ影響を与えたことに気付くようにする。

上記の産業革命と交通・通信手段の革新，中国の開港と日本の開国の学習については，小項目の主題を基にした学習上の課題（小項目全体に関わる問い）を踏まえ，小項目のねらいに則した学習を展開することが大切である。そのため，推移や展開を考察するための課題（問い）を設定し，さらに事象を比較し関連付けて考察するための課題（問い）を設定するなど，事象それぞれの学習の際に，段階的に課題（問い）を設定することが求められる。

４「日本史探究」

⑴　性格及び目標

ア　性格

「日本史探究」は「歴史総合」を踏まえ，我が国の歴史について，資料を活用し多面的・多角的に考察する力を身に付け，現代の日本の諸課題を見いだして，その解決に向けて生涯にわたって考察，構想することができる資質・能力を育成する科目として構成されている。

イ　目標

「日本史探究」の目標は⑴～⑶を関連付けることで，柱書の目標が達成される構造である。柱書は，歴史総合に準じる。

> ⑴　我が国の歴史の展開に関わる諸事象について，地理的条件や世界の歴史と関連付けながら総合的に捉えて理解するとともに，諸資料から我が国の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
>
> ⑵　我が国の歴史の展開に関わる事象の意味や意義，伝統と文化の特色などを，時期や年代，推移，比較，相互の関連や現在とのつながりなどに着目して，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や，考察，構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。
>
> ⑶　我が国の歴史の展開に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚，我が国の歴史に対する愛情，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

目標⑴では，「知識及び技能」に関わるねらいを示している。前半部分では，地理や世界史的視野に立って日本の各時代の特色や変遷を考察すること，時間軸・空間軸や政治，経済，社会，文化，国際環境など様々な側面から我が国の歴史を大きく捉えることが述べられている。

⑵　内容

＜「日本史探究」の学習の構成＞

①大項目の構成

「日本史探究」は，四つの大項目によって構成されている。

Ａ　原始・古代の日本と東アジア

この大項目では，人類が日本列島で生活を営み始めた時代から平安時代までを扱い，原始・古代がどのような時代であったかを東アジア世界の動向と関連付けて考察し，総合的に捉えて理解できるようにすることをねらいとしている。

Ｂ　中世の日本と世界

この大項目では，平安時代末から戦国時代までを扱い，中世がどのような時代であったかを東アジアやユーラシアの動向と関連付けて考察し，総合的に捉えて理解できるようにすることをねらいとしている。

Ｃ　近世の日本と世界

この大項目では，安土桃山時代から江戸時代までを扱い，近世がどのような時代であったかを世界の動向と関連付けて考察し，総合的に捉えて理解することをねらいとしている。

D　近現代の地域・日本と世界

この大項目では，近世の幕末期から現代までを扱う。今回の改訂で設置された「歴史総合」の学習を踏まえた，世界の情勢の変化とその中における日本の相互の関係や，日本の近現代の歴史を，多面的・多角的に考察し，構造的に整理して理解すること，それらを踏まえて，現代の日本の課題を考察，構想することをねらいとしている。高等学校の歴史学習のまとめとして，歴史に関わる諸事象相互の関係性や，地域と日本，世界との関係性などから構造的に整理して理解すること，さらに現代の日本の諸課題について多面的・多角的に考察して理解するとともに，歴史的経緯や根拠を踏まえて構想することをねらいとしている。

「日本史探究」は必履修科目の「歴史総合」の学習が前提となっている。

大項目ＡからＣまでの前近代の学習では，「歴史総合」で育んだ「歴史の学び方」を活用しつつ，多様な資料を効果的に活用して，問いや仮説を立てて歴史を考察，表現し，我が国の歴史の展開や伝統と文化への理解を深める学習，さらに大項目Ｄの近現代の学習では，「歴史総合」で獲得した概念やこの科目の前近代の学習とのつながり，前近代の学習で成長させた歴史を考察する力を活用し，歴史に関わる諸事象相互の関係性や，地域と日本，世界との関係性などについて構造的に整理して理解し，さらに現代の日本の諸課題について多面的・多角的に考察，構想する学習を設定している。従って，内容のＡ，Ｂ，Ｃ及びＤは，この順序で扱うことが大切である。

②中項目の構成

大項目Ａ，Ｂ，Ｃ及びＤでは，それぞれの中項目⑴から⑶までが，以下のように結びつき，一連の学習の展開をもった構造となっている。

中項目⑴では，時代を通観する問いを表現する。

時代を通観する問いとは，前の時代からの変化と新たな時代に成立した社会との関係や，その変化が時代を通じて定着していく理由や条件などを考察するために，生徒自身が設定する「問い」である。生徒が「時代を通観する問い」を表現できるように指導の工夫が大切となる。

中項目⑵では，仮説を表現する。

「日本史探究」の各大項目の中項目⑵は，大きく以下の二つのねらいを示した。一つは，対象となる時代の特色について多面的･多角的に考察し，生徒が仮説を表現し，続く⑶の学習の視点を形成することであり，もう一つは，諸資料に基づいて歴史が叙述されていることを踏まえ，資料を活用する技能を高めるとともに，歴史で活用する多くの資料について，様々な人々による保存･保全などの努力が図られていることに気付くようにすることである。

中項目⑶では，各時代の歴史の展開について，事象の意味や意義，関係性などを考察し，歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期を表現する。

また，歴史に関わる諸事象を解釈したり，説明したり，論述したりする学習を繰り返し行う中で，思考力，判断力，表現力等の育成を図る。

大項目Ｄには中項目⑷が設定されている。これは「日本史探究」のまとめとして，現代の日本の課題の形成に関わる歴史と展望について，多面的･多角的に考察，構想し，その結果を表現する学習である。

③小項目の設定

小項目は以下のようになっている。

ア　次のような知識を身につけること

イ　次のような思考力・判断力，表現力を身につけること

以下に大項目Ｃ（近世の日本と世界），中項目⑶における小項目(ｱ)の構造の例をみる。

⑶　近世の国家･社会の展開と画期

（歴史の解釈，説明，論述）

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ)　＜a＞法や制度による支配秩序の形成と身分制，貿易の統制と対外関係，技術の向上と開発の進展，学問・文化の発展などを基に，＜b＞幕藩体制の確立，近世の社会と文化の特色を理解すること。

【小項目全体の構造の例】

⑶のア(ｱ)とイ(ｱ)から構成される「⑶の小項目(ｱ)」の学習に当たっては，ア(ｱ)の＜a＞法や制度による支配秩序の形成と身分制，貿易の統制と対外関係，技術の向上と開発の進展，学問・文化の発展などを基に，イ(ｱ)の＜c＞織豊政権との類似と相違，アジアの国際情勢の変化，交通･流通の発達，都市の発達と文化の担い手との関係などに着目して，教師が例えば，「江戸幕府の支配の特徴と江戸初期の文化の背景」などの＜d＞主題を設定し，その主題を「幕藩体制が確立し，長い間維持されたのはなぜだろうか」などの学習上の課題とするための「小項目全体に関わる問い」として設定して生徒に提示する。

この「小項目全体に関わる問い」を踏まえて，＜e＞近世の国家・社会の展開について事象の意味や意義，関係性などを多面的・多角的に考察し，＜f＞歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現する学習を行うことで，アの事項の＜b＞幕藩体制の確立，近世の社会と文化の特色を理解することに至る

学習の過程が考えられる。

つまり，アの事項の＜a＞を基に，イの事項の＜c＞に着目して，＜d＞主題を設定し，それに応じた「小項目全体に関わる問い」を学習上の課題として生徒に提示する。この「問い」を踏まえて＜e＞を考察し，＜f＞を表現する学習を通して，アの＜b＞の理解に至るという構造となっている。

④事象に関わる学習と問いの構造

各小項目の主題を基にした「小項目全体に関わる問い」を踏まえ，＜e＞を考察し，＜f＞を表現する学習について，以下のｉからⅲまでの，段階的な三つの課題（問い）を設定した学習の構成を示している。

ｉ　事象の推移や展開を考察し理解を促すための課題（問い）を設定し，次に，

ⅱ　諸事象の意味や意義，関係性などを考察し理解を促すための課題(問い)を設定し，その考察の結果から，

ⅲ　諸事象の解釈や画期を考察し表現することを促すための課題（問い）を設定して，筋道を立て，根拠を示して発表したり，文章としてまとめたりするなど，

段階的な課題（問い）を設定することが求められる。

このような一連の学習の過程を通して，それぞれの小項目のねらいに示された理解に至ることが考えられる。

⑤課題（問い）の設定の例資料の取扱い

課題（問い）の設定の例については，歴史総合に準ずる。ただし，日本史探究では以下の例が追加されている。

【転換・画期】

「学習した一連の出来事について，あなたはどこに分岐点（転換点，画期）を見いだすか，それはどのような理由で，何が重要と考えたためか」

「分岐点（転換点，画期）を設定した前後の時期を比較し，それぞれの特徴を表現してみよう」

＜資料の取扱い＞

課題（問い）を設定した学習活動においては，学習全般において資料を用いて適切に活用することが重要である。そのために，資料の活用に際して，例えば，以下のような留意点が考えられる。

【資料に「問いかける」学習】

諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を段階的に身につけていくためには，例えば，文字などで記述された資料の内容と当該資料のもつ文脈，状況，前後関係，背景を理解していくことが重要である。文字資料であれば，そこに書かれた内容から，「いつ書いたものか，どんな人物が書いたものか，どこに発表したものか」など，人物，日付，出来事などを読み取る。

さらに「それは作成者が直接見聞した記録か，伝聞の記録か，解釈や仮説か，作成者個人の感想か」，「この資料が作成された背景とはどのようなものだったのか，また，どのような意図があったと考えるか」などを教師が問い，生徒が資料のもつ意味や重要性を考えることができるように指導を工夫することが大切である。

また，ある歴史的な事象に関する複数の資料を比較検討して異同を確認することなどの活動は，歴史の多様な解釈の叙述について理解することができ，生徒に疑問を生じさせることに有効であると考えられる。その際，例えば，絵図と文書のように異なる種類の資料を用いることで，より深い読み取りを促すことができる。

【様々な資料の活用とその事例】

新聞・雑誌等を含む文献資料をはじめ，建造物や日常の生活用品も含めた遺跡や遺物， 絵画や地図，写真等の画像，映画等の映像，それに伝承や習俗，地名，言語など，様々なものが歴史を考察する上での資料として活用できる。今日に残された資料を歴史資料として扱う際には，それぞれの資料としての有効性や限界等の基本的な特性が存在することを 理解できるようにすることが大切である。その理解を踏まえ，資料から過去の出来事や景観，生活，思想，社会，伝統や文化などを推察する学習活動を通じて，歴史資料が果たす役割に気付くようにして，歴史への関心が高められるようにすることが大切である。また，「デジタル化された資料や，地域の遺構や遺物，歴史的な地形，地割や町並みの特徴などを積極的に活用」（内容の取扱い）については，以下のような活用が考えられる。

【デジタル化された資料の活用】

博物館，図書館，公文書館などでは，その収蔵品をはじめ，文化資源をデジタル化して保存を行うとともに，公開や利用を積極的に行う取組が進んでいる。これらの「デジタル化された資料」は，インターネットを利用することで，利用の可能性を拡大している。多様な歴史資料にアクセスすることで，一層の具体性をもった学習が可能となる。また資料の目録情報に加え，様々な歴史情報のデータベースが整備されてきており，それらの情報を活用し，指導計画上に適切に位置付けることが考えられる。

【地域に残る遺構や土地利用の変遷の活用】

「地域の遺構や遺物」には，地域の特徴によって，原始・古代から近代まで，様々な遺構・遺物が存在する。貝塚，古墳，都城址，城址などの遺構，石器，土器，骨角器，青銅器などの遺物や近代の産業遺産，戦争遺跡，記念碑などに至るまで，地域の歴史を読み解

く手がかりが残される場合も多い。また，近年の考古学の成果により新たな歴史的な発見が積み重ねられている。

第二次世界大戦後の高度経済成長期には，国土の大規模な開発が進んだが，江戸時代の絵図や明治期の地形図や地籍図を用い，「歴史的な地形」の変遷をたどることで，地域の発展の歴史を追うこともできる。

考察を促す資料の活用については，生徒の学習状況や動機付けなどを踏まえることが最も重要である。ここに示した事例はあくまでも参考であり，教師が学習の状況を踏まえて，様々な状況に応じた工夫をすることが大切である。

【埼玉県の場合】

埼玉県には埼玉県立文書館がある。埼玉県立文書館は昭和 44 年に開設された，日本で 4 番目の都道府県立文書館であり，埼玉県地域の中近世から近現代に及ぶ古文書類，明治初年以来の県の行政文書（公文書）・行政刊行物のほか，県域を中心とした地図・航空写真，『新編埼玉県史』編さん時の収集資料，埼玉新聞社撮影の戦後報道写真など，130 万点を超える記録資料を収蔵している。ホームページには収蔵資料検索システムがあり，資料を検索してから訪問することができる。埼玉県では県立文書館の資料を扱った「埼玉県立文書館史料を用いた授業モデル」としてまとめ，各学校に配布しているので活用されたい。

５　「世界史探究」

⑴　性格及び目標

ア　科目の性格

「世界史探究」は，地理歴史科の中に設けられた標準単位数３単位の選択科目である。今回の改訂で設置された必履修科目である「歴史総合」の学習によって身に付けた資質・能力を基に，世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について，地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解するとともに，事象の意味や意義，特色などを考察し，よりよい社会の実現を視野に，歴史的経緯を踏まえて，地球世界の課題を探究する科目である。

イ　目標

「世界史探究」の目標は，地理歴史科の目標構成と同様に，柱書として示された目標と，「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の資質・能力の三つの柱に沿ったそれぞれ⑴から⑶までの目標から成り立っている。これら⑴から⑶までの目標を有機的に関連付けることで，柱書として示された目標（「歴史総合」に準ずる）が達成されるという構造になっている。

⑴　世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について，地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解するとともに，諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

⑵　世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義，特色などを，時期や年代，推移，比較，相互の関連や現代世界とのつながりなどに着目して，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や，考察，構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。

⑶　世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚，我が国の歴史に対する愛情，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

目標の⑴は，「世界史探究」の学習を通じて育成される資質・能力のうち，「知識及び技能」に関わるねらいを示している。

この科目では，地球の誕生や人類の誕生を視野に入れつつ，古代文明の形成から現代に至る世界の歴史の展開を扱い，諸地域の歴史的特質の形成，諸地域の交流・再編，諸地域の結合・変容という大きな枠組みを基に，世界の歴史を大きく捉えることができるようにすることを求めている。また，課題の解決に向けて必要な社会的事象に関する情報を収集する技能，収集した情報を社会 的事象の歴史的な見方･考え方を働かせて読み取る技能，読み取った情報を課題の解決に向けてまとめる技能を求めている。その際，小学校や中学校の社会科，「歴史総合」での学習を踏まえ，生徒が身に付けた技能を繰り返し活用して習熟を図るように指導することが大切である。

目標の⑵は，「世界史探究」の学習を通じて育成される資質･能力のうち，「思考力， 判断力，表現力等」に関わるねらいを示している。

ここでは，「世界史探究」において養われる思考力，判断力を，社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせて，歴史に関わる事象の意味や意義，特色，事象相互の関連を多面的・多角的に考察する力，歴史に見られる課題を把握して，学習したことを基に複数の立場や意見を踏まえ，その解決を視野に入れて構想できる力と捉えることが示されている。

目標の⑶は，「世界史探究」の学習を通じて育成される資質・能力のうち，「学びに向かう力，人間性等」に関わるねらいを示している。

教科目標に「地理や歴史に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養う」と示されたことを受けて，歴史に関わる諸事象について，生徒自らが関心をもって学習に取り組むことができるようにするとともに，学習を通してさらに関心が喚起されるよう指導を工夫する必要性が示されている。また，そうした学習を通して涵養される日本国民としての自覚，我が国の歴史に対する愛情，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚を深め，「学びに向かう力・人間性等」を養うことが示されている。

⑵　内容とその取扱い

①大項目の構成

「世界史探究」では，ＡからＥの大項目が一つの学習のまとまりを示しており，それぞれにおいて課題を追究したり解決したりする活動を通して学習が展開するよう構成されている。生徒が世界の歴史の大きな枠組みと展開への理解を深め，地球世界の課題について探究するという趣旨から，大項目Ａ「世界史へのまなざし」，大項目Ｂ「諸地域の歴史的特質の形成」，大項目Ｃ「諸地域の交流・再編」，大項目Ｄ「諸地域の結合・変容」，大項目Ｅ「地球世界の課題」を設定した。この五つの大項目を通して，地球世界につながる諸地域の社会や文化の多様性や複合性について段階的に考察を深めるような構成となっている。

また，大項目Ｂ，Ｃ及びＤでは，社会的な事象の歴史的な見方・考え方や資料の取扱いに関する基本的な技能を活用して，生徒が資料から課題を見いだし，自ら学習を深めることができるように，それぞれ中項目が設定されており，以下のように結び付いた一連の学習の展開を構成している。

②中項目の構成

大項目Ａでは，「⑴地球環境から見る人類の歴史」「⑵日常生活から見る世界の歴史」の二つの中項目で構成されている。この科目の導入として，人類の生存基盤をなす自然界に見られる諸事象や日常生活に見られる諸事象を扱い，地球環境と人類の歴史との関わりや，身の回りの事象と歴史との関わりを考察し，世界史を時間と空間の相で理解することをねらいとしている。

また，大項目Ｂ，Ｃ及びＤでは，社会的事象の歴史的な見方・考え方や資料の取扱いに関する基本的な技能を活用して，生徒が資料から課題を見いだし，自ら学習を深めることができるように，それぞれ中項目⑴から⑷が設定されている。

中項目⑴では，生徒の学習意欲を喚起する具体的な事例を取り上げ，諸資料を活用し情報を読み取ったりまとめたりする技能を身に付けるとともに，諸地域の歴史的特質の形成，諸地域の交流・再編，諸地域の結合・変容を読み解く観点について考察し，問いを表現する。

中項目⑵，⑶及び⑷では，主題を設定し，生徒の課題意識を深めたり，新たな課題を見いだしたりすることができるように，資料を活用して課題を考察する。主題の設定に当たっては，中項目⑴の生徒が表現した問いを踏まえ，学習のねらいに則した考察を導くように留意する。それらの主題を，学習上の課題とするための問いを設定することで，地球世界の課題の形成に関わる世界の歴史の大きな枠組みと展開について理解を深める学習が考えられる。また，主題の設定は，生徒の学習が進むにつれて，生徒自身が中項目⑴で見いだした問いを基に設定することも考えられる。

さらに，大項目Ｅでは，「⑴国際機構の形成と平和への模索」「⑵経済のグローバル化と格差の是正」「⑶科学技術の高度化と知識基盤社会」「⑷地球世界の課題の探究」の四つの中項目で構成されている。「地球世界の課題」を扱い，諸資料を比較したり，関連付けたりして読み解き，探究する活動を通して，歴史的に形成された地球世界の課題を理解することをねらいとしている。

③小項目の構成

大項目Ｂ，Ｃ及びＤの中項目⑵，⑶及び⑷の学習は，小項目である「ア　知識及び技能（「次のような知識を身に付けること」と提示される）」と「イ　思考力，判断力，表現力等（「次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること」と提示される）」から構成されている。ここでは，大項目Ｂ「諸地域の歴史的特質の形成」の中項目⑶「諸地域の歴史的特質」のア(ｱ)とイ(ｱ)で構成される小項目を例に，「世界史探究」の学習内容と学習過程の構造について以下に示す。

【小項目全体の説明の例】

⑶　諸地域の歴史的特質

ア　次のような知識を身に付けること。

(ｱ)　<u>＜a＞秦・漢と遊牧国家，唐と近隣諸国の動向など</u>を基に，<u>＜b＞東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質</u>を理解すること。

イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(ｱ)　＜c＞東アジアと中央ユーラシアの歴史に関わる諸事象の背景や原因，結果や影響，

事象相互の関連，諸地域相互の関わりなどに着目し，＜d＞主題を設定し，諸資料を比較したり関連付けたりして読み解き，＜e＞唐の統治体制と社会や文化の特色，唐と近隣諸国との関係，遊牧民の社会の特徴と周辺諸地域との関係などを多面的･多角的に考察し，表現すること。

例えば，⑶のア(ｱ)とイ(ｱ)から構成される「⑶の小項目(ｱ)」の学習に当たっては，ア(ｱ)の＜a＞秦・漢と遊牧国家，唐と近隣諸国の動向などを基に，イ(ｱ)の＜c＞東アジアと中央ユーラシアの歴史に関わる諸事象の背景や原因，結果や影響，事象相互の関連，諸地域相互の関わりなどに着目し，教師が例えば，「東アジアや中央ユーラシアの社会や文化の特徴」などの＜d＞主題を設定し，その主題を，「東アジアや中央ユーラシアは，社会，宗教，文化・思想の面でどのような特徴をもっていたのだろうか」などの学習上の課題とするための「小項目全体に関わる問い」として設定して生徒に提示する。この「小項目全体に関わる問い」を踏まえて，諸資料を比較したり関連付けたりして読み解くなどして，＜e＞唐の統治体制と社会や文化の特色，唐と近隣諸国との関係，遊牧民の社会の特徴と周辺諸地域との関係などを多面的・多角的に考察したり表現したりすることにより，アの(ｱ)の＜b＞東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質を理解することに至る学習の過程が考えられる。

つまり，アの事項の＜a＞を基に，イの事項の＜c＞に着目して，＜d＞主題を設定し，それに応じた「小項目全体に関わる問い」を学習上の課題として生徒に提示する。この「問い」を踏まえて，＜e＞を考察し表現して，アの＜b＞の理解に至るという構造になっている。

④事象に関わる学習と問いの構造

小項目全体の説明の後に，＜ａ＞に示された複数の事象について，考察し表現するためのそれぞれの事象の取扱い方を以下のように示している。

唐と近隣諸国の動向については，遊牧国家との接触を背景に隋・唐が成立したこと，唐の支配体制，近隣諸国との関係を扱い，唐による広域支配の安定と，日本や新羅，渤海などが唐の政治制度や文化を取り入れることで国家体制の整備を進めたことを気付くようにする。また，パミール高原を挟む東西の地域にトルコ系王朝が移動・定住することで，多くの地域でトルコ系の言語・文化が広がり，やがてイスラームを受け入れたことに触れる。

【(ｱ)の＜a＞のうち，唐と近隣諸国の動向についての学習の展開例】

＜a＞の事象を学習する際に，小項目の主題を基にした「小項目全体に関わる問い」を踏まえ，「事象の推移や展開を考察し理解を促すための課題（問い）」（以下，「推移や展開を考察するための課題（問い）」）を設定し，さらに「事象を比較したり相互に関連付けたりして考察し，追究を促すための課題（問い）」（以下，「事象を比較し関連付けて考察するための課題（問い）」）を設定して考察の結果を表現するなど，段階的に課題（問い）を設定する学習を例として示している。以下は(ｱ)の＜a＞に示された事象のうち，唐と近隣諸国の動向について，課題（問い）を設定した学習の例である。

例：唐と近隣諸国の動向について，課題（問い）を設定した学習の例

例えば，「唐は近隣諸国にどのように接していたのだろうか」などの，推移や展開を考察するための課題（問い）を教師が設定する。生徒は，諸資料を活用して，唐と近隣諸国の関係の特徴などを読み取ったり，近隣諸国の共通点やそれぞれの相違点を考察したりして東アジアの国際秩序の特徴を理解する。

次に，「あなたは，日本が国家形成にあたって，唐に学んだことで最も重要だったことは何だと考えるか」などの，事象を比較し関連付けて考察するための課題（問い）を設定し，遣唐使の活動や正倉院の遺物などを示し，東アジアの中の日本の位置付けを多面的・多角的に考察し，表現する。

具体的な課題（問い）については，各小項目の＜a＞の事象のうちの一つのみの例を示しているが，例に示した事象以外についても，同様に段階的な課題（問い）を設定して学習することが大切である。

なお，問いの例は，あくまで参考であり，教師が，生徒の興味・関心や学校，地域の実態等に留意し，様々な状況に応じた工夫をすることが大切である。

⑤課題（問い）の設定と資料の活用

これについては，歴史総合の「⑵内容の取扱い⑤課題（問い）の設定と資料の活用」と同じ内容となるので，そちらを参照いただきたい。

第３　各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

１　指導計画作成上の配慮事項

⑴　単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質･能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るように

すること。その際，科目の特質に応じた見方・考え方を働かせ，社会的事象の意味や意義などを考察し，概念などに関する知識を獲得したり，社会との関わりを意識した課題を追究したり解決したりする活動の充実を図ること。

⑵　地理歴史科の目標を達成するため，公民科などとの関連を図るとともに，地理歴史科に属する科目相互の関連に留意しながら，全体としてのまとまりを工夫し，特定の事項だけに指導が偏らないようにすること。

⑶　各科目の履修については，全ての生徒に履修させる科目である「地理総合」を履修した後に選択科目である「地理探究」を，同じく全ての生徒に履修させる科目である「歴史総合」を履修した後に選択科目である「日本史探究」，「世界史探究」を履修できるという，この教科の基本的な構造に留意し，各学校で創意工夫して適切な指導計画を作成すること。

地理歴史科の５科目については，「地理総合」と「歴史総合」を必ず履修することになっており，「地理探究」については「地理総合」の履修を前提に，「日本史探究」，「世界史探究」については「歴史総合」の履修を前提に，その後に履修できる選択科目である。それぞれが重点目標や独自の内容構成をもつ科目であり，履修単位数，修得単位数に関わりなく，「地理探究」の履修をもって「地理総合」の，「日本史探究」，「世界史探究」のいずれか，あるいは両方の履修をもって「歴史総合」の履修に代えることはできないことに厳に意を払い，適切な教育課程の編成に当たる必要がある。「この教科の基本的な構造に留意し，各学校で創意工夫して適切な指導計画を作成すること」と示したのは，その意を表したものである。

２　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

これからの時代に求められている資質・能力を身に付け，生涯にわたって能動的に学び続けるようにするためには，埼玉県におけるこれまでの優れた教育実践の蓄積も生かしながら，学習の質を一層高める授業改善に取り組むことが大切である。特に本県が平成 22 年から取り組んでいる協調学習は，「主体的・対話的で深い学び」を実現する上で有効な「学び」の一つである。

指導授業計画の作成に当たっては，科目の特質に応じた見方・考え方を働かせ，社会的事象の意味や意義などを考察し，概念などに関する知識を獲得したり，社会との関わりを意識した課題を追求したり解決したりする活動の充実を図るよう配慮する。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に当たっては，「知識及び技能が習得されるようにすること」「思考力・判断力・表現力等を育成すること」「学びに向かう力，人間性を涵養すること」が偏りなく実現されるよう，単元や題材などの内容や時間のまとまりを見通し，生徒の学びに有効な場面やタイミングを見極めながら，例えば，近世初期のヨーロッパの国際関係の理解を深めるために知識構成型ジグソー法による協調学習を実践するなど継続的に授業改善に取り組むことが重要である。

３　内容の取扱いに当たっての配慮事項

⑴　社会的な見方・考え方を働かせることをより一層重視する観点に立って，社会的事象の意味や意義，事象の特色や事象間の関連，社会に見られる課題などについて，考察したことや構想したことを論理的に説明したり，立場や根拠を明確にして議論したりするなどの言語活動に関わる学習を一層重視する。

⑵　調査や諸資料から，社会的事象に関する様々な情報を効果的に収集し，読み取り，まとめる技能を身に付ける学習活動を重視するとともに，作業的で具体的な体験を伴う学習の充実を図るようにすること。その際，地図や年表を読んだり作成したり，現代社会の諸課題を捉え，多面的・多角的に考察，構想するに当たっては，関連する各種の統計，年鑑，白書，画像，新聞，読み物，その他の資料の出典などを確認し，その信頼性を踏まえつつ適切に活用したり，観察や調査などの過程と結果を整理し報告書にまとめ，発表したりするなどの活動を取り入れるようにする。

⑶　社会的事象については，生徒の考えが深まるよう様々な見解を提示するよう配慮し，多様な見解のある事柄，未確定な事柄を取り上げる場合には，有益適切な教材に基づいて指導するとともに，特定の事柄を強調し過ぎたり，一面的な見解を十分な配慮なく取り上げたりするなどの偏った取扱いにより，生徒が多面的・多角的に考察したり，事実を客観的に捉え，公正に判断したりすることを妨げることのないよう留意する。

⑷　情報の収集，処理や発表などに当たっては，学校図書館や地域の公共施設などを活用するとともに，コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を積極的に活用し，指導に生かすことで，生徒が主体的に学習に取り組めるようにすること。その際，課題の追究や解決の見通しをもって生徒が主体的に情報手段を活用できるようにするとともに，情報モラルの指導にも留意する。